

2018 TOEIC® セミナー報告書

企業が求めるグローバル人材像と
社会を見据えた大学英語教育
～ TOEIC® Programの様々な活用方法 ～

●2018年9月1日(土) グランフロント大阪 コングレコンベンションセンター

企業が求めるグローバル人材像と 社会を見据えた大学英語教育

～ TOEIC® Programの様々な活用方法 ～

2018年9月1日(土) グランフロント大阪 コングレコンベンションセンター

基調講演 **ダイキン工業株式会社** 1

ダイキン工業が求めるグローバル人材

人事部 採用グループ担当部長 東風 晴雄 氏

事例発表 ① **同志社大学** 7

ALL DOSHISHA教育推進プログラム“同志社大学ビジョン2025”

－ 同志社大学の英語教育と英語民間試験の活用方策と目的 －

学長補佐・文学部教授 圓月 勝博 氏

事例発表 ② **山口大学** 14

グローバル技術者養成プログラムにおける英語教育

－ TOEIC® Programと未来のグローバル技術者を結ぶCLIL活用型授業実践事例の紹介 －

大学院創成科学研究科・准教授 兼 工学部附属工学教育研究センター・語学教育強化室長 植村 隆 氏

事例発表 ③ **近畿大学** 22

TOEIC® Programの全学導入とその効用、 および国際学部における先進的な取り組みと海外留学の成果

インターナショナルセンター担当副学長・理工学部部長 藤原 尚 氏

国際学部長代理 藤田 直也 氏

Q&Aセッション 31

主催：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
後援：大阪商工会議所、公益社団法人 関西経済連合会、グローバル人材活用運営協議会、米国大使館

ダイキン工業が求めるグローバル人材



ダイキン工業株式会社 人事部 採用グループ担当部長 **東風 晴雄 氏**

■ 7万人を超えるグローバル従業員数

ダイキン工業株式会社の東風と申します。本セミナーは、3年ぶりの関西での開催とお聞きしております。このような貴重な場にお招きいただき、主催の国際ビジネスコミュニケーション協会の方々をはじめ、関係者の皆様方には、厚く御礼を申し上げます。

本日は「ダイキン工業が求めるグローバル人材とは」と題しまして、前半でダイキンの事業戦略の状況、特にグローバル展開についてお話をさせていただきます。今回のセミナー参加者の方々は、大学関係の先生方、あるいは高専、高等学校の先生方、ならびに教職員の方々が多いとお聞きしております。後半には演題に沿って、求める人材、および当社が事業拡大のための経営の重要課題の一つとして取り組んでいるグローバル人材の採用・育成についてお話しさせていただきます。

まず、ダイキン工業株式会社の概要をご紹介します。当社は、空調、化学、フィルタ、油機、特機、電子システムなどの事業を展開する、グローバルな空調総合メーカーです。今から94年前に、大阪で創業しました。55年前に大阪金属工業という名前から、略してカタカナのダイキン工業と社名変更をしております。いま現在もここ大阪に本社を置いています。

グローバル代表兼会長は1994年に社長に就任して以来、先進的な経営の着眼点を持ってグローバル事業展開の指揮を取り、事業拡大を進めてきた井上礼之、そして社長兼CEOは7年前に社長に就任した十河政則です。グループ会社は現在269社あります

が、このうち90%以上が、海外に立地する子会社です。この数字には、自前で設立した会社に加え、M&Aを行った会社も含まれています。

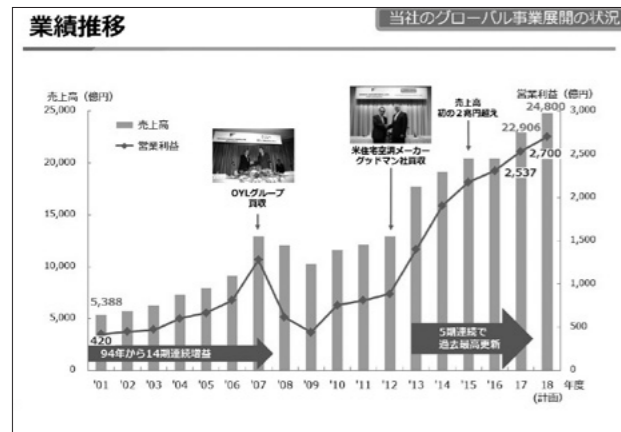
グローバル展開の状況は、現在150カ国以上に空調機を含む商品を販売展開しており、売上高の76%を海外が占めています。また、生産拠点は90カ所あり、国内は4カ所のみで、それ以外は海外にございます。後ほどより詳しくお話ししますが、空調機は世界の各地域毎に製品ニーズが異なっており、また、冷夏や猛暑など年々の環境の変化によって需要変動が激しい商品であるため、工場を世界各地に開設し、いわゆる生産の最寄り化を進めてきました。

ダイキン工業(株)単体の従業員数は、現在7,036人(出向者を含めると8,292人)。一方で、国内外のグループ会社を含めたグローバル連結人員数は計7万人を超え、海外従業員比率は82%となっています。

■ 世界各地での適材適所な商品を追求

当社のグローバル事業展開の業績の推移を次ページにご紹介いたします。

棒グラフが売上高、折れ線グラフが営業利益を示しています。1994年以降、海外事業展開を進めてきた結果、2007年まで14年連続で増収増益を続けてきました。その後2008年のリーマンショックをはさんで、2009年以降は再び増収増益基調となり、2013年以降は、5期連続で過去最高益を更新しています。



その間、大きなM&Aをいくつか行っています。特に大きなものが2006年に実施したOYLインダストリーズの買収と、2012年のGoodman社の買収です。それまで参入が難しかった北米の業務用空調と住宅用空調の市場で足場を築くとともに、それぞれ翌年に連結対象となり、売上、営業利益の大幅な増に寄与しました。

事業別売上高構成をご紹介しますと、特に空調事業が他の事業以上に大きく伸びた結果、現在では全体の90%近くを空調が占めています。続いて、化学事業が8%、その他と続きます。ダイキンの化学事業の歴史は古く、空調等の冷熱機器の冷媒に安全な材料として安定性のあるフロンガスを使うという観点で1933年にスタートしており、現在は半導体や自動車など、様々な用途にフッ素化学製品群を展開しています。実は、このように化学と機械の両方の事業を行っているメーカーは世界的に見ても珍しく、また、空調



機のメーカーとして冷媒まで作っているのは世界で当社だけで、この特徴を生かして地球環境に優しい冷媒と空調機を他社に先駆けて開発する取り組みを行っています。

空調事業は、住宅用の製品にも力を入れています。特に商業用の製品で高い市場シェアを持っています。一般のオフィスや店舗で使われるものから、空港や競技場、高層オフィスビルなど大型の施設等で使われる産業用まで、様々な商品群を保有しています。

また、前述した地域によって異なるニーズにも対応しています。例えば四季がある日本では、冷暖房、除湿や加湿といった機能が求められますが、他の地域ではそうとは限りません。建築様式の違いにも影響されます。例えばアメリカでは日本と違い、一般の家庭に機械室があり、そこに室内機を納め、そこからダクトと呼ばれる管を通して冷気や暖気を各部屋に供給します。このように、世界各地それぞれの気候あるいは建築様式や電力事情、趣味趣向など、各地域のニーズに商品あるいは売り方を考えて対応していくことが必要となります。非常に面白い事業だと思います。

人材の面では、営業はもちろん、商品開発、マーケティングやサービスの人材獲得・育成が各地域・国毎に必要となります。一方で、彼らとやりとりをする本社側の各部門にもグローバル人材が多く求められます。

■ 2020年度に向けた既存事業の強化と事業領域の拡大

ダイキンは、5年に1度、戦略経営計画を立てています。現在は2020年を最終年度とした戦略経営計画FUSION20の最中です。先日、中間年として振り返りと後半3カ年の計画策定を行いました。

空調事業は、今後3年間は特に北米とアジアを重点的に伸ばす計画です。また、化学事業やフィルタ事業も3本柱として強化。加えて、エネルギーソリューションや空気・空間エンジニアリングといった新たな事業領域の拡大・構造転換を図っていきます。

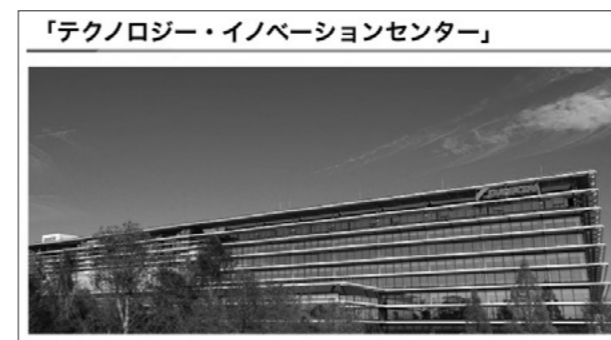


近年は自動車産業をはじめ、多くの産業で第四次産業革命による産業・社会構造の変化やAI・IoT技術の進展が始まっています。あわせて、世界中で地球環境への意識も高まっており、例えばヨーロッパでは温室効果ガス排出削減に向け燃焼暖房からヒートポンプへの転換も進んでいきます。FUSION20後半3カ年計画では、世界の変化をピンチではなくチャンスと捉え、2020年とその先に向けたさらなる展開に取り組んでいきたいと考えています。

■ 世界中のニーズに応えられるよう、協創イノベーション拠点を設立

こうした中長期の展開に対応するため、ダイキン技術開発のコア拠点として、2015年に大阪府摂津市に最先端のオフィスと設備を揃えたテクノロジー・イノベーションセンター（以下、TIC）を設立しました。

TICのオフィス大空間は、間仕切壁を排して異分野



の技術者同士による協創を促進しており、約700人の技術者が一堂に会して研究開発業務を行っています。また、社外の先生方に来ていただくフェロー室や円形講義室など様々なスペースを設けています。世界でここにしかないような、空気あるいは空調の最先端の実験設備も備えています。

TICを、日本人だけでなく、外国人社員、さらには社外の方々も加わり、新たなソリューションを展開していくための協創のベースにするとともに、世界中の競争に対する圧倒的な差別化となるベース技術の開発、さらには、グローバル全体の開発を統括していくコントロールタワーにすべく取り組んでいます。

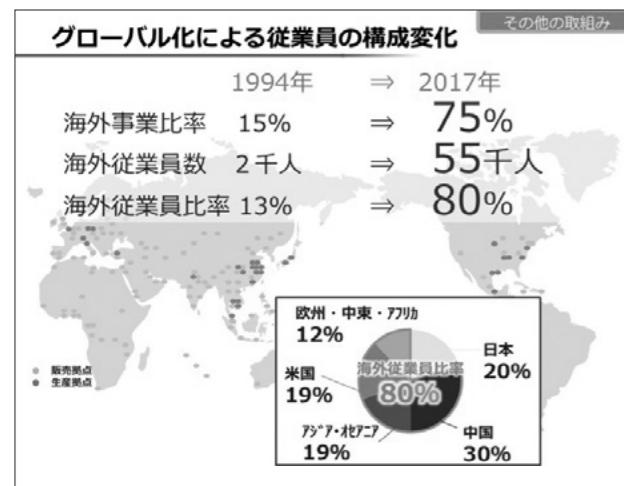
■ 経営の多様性を目指した人材雇用

ダイキンは、人材の多様性によるダイバーシティ推進という観点で、これまでベテラン層の雇用や女性活躍推進、障がい者雇用などに取り組んできました。例えば、ベテラン層への取り組みとしては、2001年にはいち早く希望者全員が65歳まで働けるようにしました。女性に対しての制度としては、2011年に経営トップ直轄のプロジェクトを立ち上げ、会社の重点施策の一つとして、出産や育児をキャリアブレイキにしないための環境整備などを行ってきました。また、女性の採用にも力を入れており、特に理系女子の採用数は70人を超え、全国トップレベルにあると自負しています。障がい者についても、1993年に設立した(株)ダイキンサンライズ摂津において、障がい者がやりがいを持って働ける職場環境による雇用拡大と事業の黒字化の両立を図ってきたほか、現在は、ダイキン工業本体およびグループ会社で障がい者の雇用に積極的に取り組んでいます。

加えて、外国人雇用と育成・登用も進めています。1994年から2017年にかけて海外事業比率は15%から75%に伸びました。この間、海外現地で雇用した外国人の従業員数も2,000人から5万5,000人に伸び、全体の80%を超えました。彼らにもグローバルに成長

するチャンスがあります。日本本社の取締役9人のうち、母国で長年実績を上げて成長した外国人が2人登用されています。

日本本社における外国籍社員は93人です。1989年から外国人雇用を開始、現状は基幹職、いわゆる管理職の方も大勢います。国籍数は17カ国で、国別に従業員数を見ると、一番多いのは中国、次にインド国籍の方です。その他にも東南アジア各国をはじめ、アメリカ、フランス、ポルトガル、ロシア、エクアドル、チュニジアやシリアの国籍の社員も働いています。外国籍の社員も、日本人と等しく競争しながら成長しています。2012年以降は毎年10人以上の外国籍の社員を採用しています。中国、インド、東南アジアのトップ大学からの直接採用も実施しています。その対象は、ダイキンがこれから伸ばしていきたいコア技術領域に明るい人。あるいは、日本人にはなかなかない特徴を持って業績に貢献する人。そしてこれから重要となるAI・IoTの優秀技術者などです。



■『人を基軸に置く経営』

ここまでグローバル事業展開状況をご説明してまいりましたが、次に当社の社風、そして、求める人材像と採用・育成についてお話しします。

まず、ダイキンの人材に対する考え方のベースは『人を基軸に置く経営』という理念で、「社員一人ひとりの

当社の組織風土

『人を基軸に置く経営』

- 1) 企業の競争力の源泉は『人』
働く一人ひとりの成長の総和が企業の発展の基盤
- 2) 人の持つ無限の可能性を信ずる『性善説』
- 3) 失敗を恐れず高い目標に挑戦し続けることで人は成長する。
- 4) 企業と個人は対等の立場で互いに選択しあつた関係
企業は理念に共感する社員に能力発揮のチャンスを提供し、帰属意識・ロイヤリティを強く求める
- 5) 多様な個性を活かし組織の力とするチームワーク
- 6) 納得性とスピードを同時追求する『フラット＆スピード』の経営

成長の総和が企業の発展の基盤」いう考えを大きな軸とします。一人ひとりの社員の持つ無限の可能性や、高い目標に挑戦し続けることによる人の成長を信じています。例えば、年齢が若くても意欲があり優秀な人には思い切って重要なテーマやミッションを与え、修羅場を乗り越えたり、逆に失敗を糧とすることで成長を促しています。

また、『フラット＆スピード』、『コアマンとサポーター』などのキーワードがあります。例えば『フラット＆スピード』とは、個々の課題に対して、トップが対応を決めて下に伝える、いわゆるトップダウンではなく、課題に関係する社員みんながフラットに情報を共有・議論をし、最終的にリーダーないしトップが意思決定をするという組織運営のスタイルです。議論に関わった社員は、たとえ自分の持論と異なった結論になったとしても、その議論に関わったことで意識が変わり、モチベーションを高く持って実行に取り組むことができます。

こうしたキーワードを通じて組織風土がグローバルで共有されることによって、海外の社員とも仕事がしやすいという面もあると感じています。

このような経営のもと、求めるダイキンの社員像についてご説明します。当社は今後も環境対応技術をはじめとする世界をリードする技術の強化と、他社に先んじた新たなソリューションの展開を行い、顧客へ高い価値を提供して、引き続きグローバルに事業を拡大していこうとしています。このダイキンの方向性、大志に共感していただき、誇りとロイヤリティを持って自ら

の業務に愚直に取り組むとともに、世界での戦いの中で自らたくましく成長しようと、前例にとらわれない自由な発想と向上心を持って課題やテーマに果敢に挑戦できる方。そして、目標に向かって自ら燃え上がり、周りの日本人も外国人社員も巻き込んで信念を持って突き進み業績へ貢献していく、そのような資質を持った方に来てもらいたいと思っています。シンプルに表現すると、グローバルで活躍する、野性味溢れるイノベーター人材を求めているのです。

ちなみに、ここ数年の新卒採用数は約430人。うち大卒技術系290人、事務系60人、高専・短大卒80人です。

■ OJTとOFF-JTを組み合わせた人材育成

次に、ダイキンの人材育成ですが、OJTが全てのベースにあります。加えて、OFF-JTを用意しており、全員参加型、選抜型、自主参加型の3種類があります。

英会話研修につきましては、それぞれの領域で目的に合わせて行っています。大卒および高専卒の新入社員全員を対象に行っている6週間の新人研修の期間には、全員にTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) 団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下IPテスト)を行います。障がい者対応のTOEIC® Testsも実施しています。

さらに教師との1対1の英会話テストでは、新入社

採用と人材育成

人材育成の基本的な考え方

- ・当社の人材育成のベースとなる考え方は、「現場のOJTでこそ人は育つ」、「修羅場体験が人を育てる」
- ・昨今、OJTだけでは、グローバル展開をリードする人材の育成が追いつかないこともあり、OFF-JTのプログラムを強化。
- ・人材育成の主軸は今後もOJTだが、OFF-JTを加えて育成を加速。

【主なOFF-JTプログラム】

形式	全員参加型	選抜型	自主参加型
対象	マネジメント層	メンバー層	メンバー層
研修内容	マネジメント研修 新任基幹職研修	経営幹部塾 海外赴任前研修 海外拠点実践研修 D-CAP 情報技術大学	英会話研修

英会話研修等 (DIET/TOEIC等) 各種通信教育

員全員を実力に応じたクラス分けをした上で、4日間の英会話研修を受けさせています。1クラス10人程度としており、当社基準でレベル1～2と教師に判定された新入社員が属するクラスが毎年2クラスほどできます。この2クラスの生徒だけは、ほぼ全員がTOEIC L&Rで800点以上を取っています。この2クラスの新入社員は英語で日常業務ができるレベルという認識があるため、その後の配属におきましても特定の部署から、ぜひ配属してほしいと言われるようです。

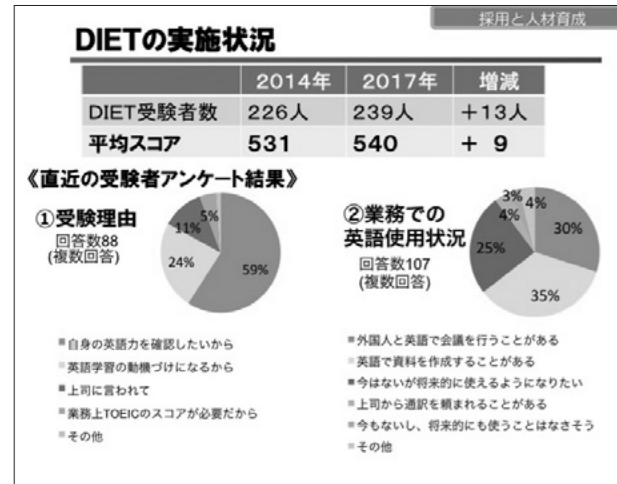
ちなみに、この研修でのTOEIC L&R IPテストのスコアデータを振り返ってみますと、直近の数値では、大卒の事務系が681点、技術系が520点です。3年前の新入社員と比べてアップしてはいますが、今後もTOEIC L&Rはできるだけ高いスコアを目指して努力していただき、仕事のベースとしての語学力を身に付けてもらいたいと考えます。

■ 実践研修のなかで英語力を伸ばす

選抜型研修の一つに、海外拠点実践研修があります。入社3年目から8年目ぐらいの若手社員を対象に毎年約30人、世界各地に1人ずつ、1年間から2年間行ってもらい成長を促す研修です。研修といいながら、仕事のテーマも与えて、帰国時に発表もしてもらいます。

研修参加前にTOEIC L&Rを受験させていますが、研修参加後もTOEIC L&Rを受けた社員をピックアップして研修参加前後のスコアの変化を見てみたところ、事務系、技術系、それぞれの平均スコアが91点、79点アップしていることが分かりました。また、派遣先の地域別に見ても、世界5極全ての平均スコアが同程度アップしていました。

この研修は、英語力に関係なく、目的をもってその人を育成したいということで選抜をしていますし、英語力のアップそのものは研修の目的ではありませんが、結果としてTOEIC L&Rスコアがアップしているわけです。しかし、研修を終えた後でも、もともとのスコアが低かった人は、残念ながら800点、900点まではな



なかなか到達していません。そういう意味では、学生のうちにどれだけ高い英語力を身に付けているのか、あるいは、英語を学習する基礎が身に付いているかが、非常に大事になると考えております。

また、自主参加の研修の一環で、一般社員がTOEIC L&Rを受けられるDIET (DAIKIN INTERNATIONAL ENGLISH TEST) という制度を設けています。

2014年と2017年を比べてみると、DIETの受験者数が増え、また、平均スコアも若干上がっています。受験者へのアンケートで受験目的を聞いたところ、「自身の英語力を確認したいから」、「英語学習のモチベーションになるから」等が挙げられました。

仕事で英語を使う機会はまだまだ少ないが、今のうちに英語力を伸ばしたいという社員も大勢います。少人数形式の英会話や通信教育など、自主参加型の語学研修もいくつか用意していますが、今後も強化の必要があると感じます。

■ 社内大学で先端分野の人材を育成

空調や化学の分野も、自動車の分野における自動運転技術と同じように、AI・IoTによって大きなイノベーション、あるいはパラダイムシフトが始まると考えています。実際にサーモスタットに人工知能を使うなど、従来とは違う切り口から空調市場に進出しようとする異分野の企業も出てきました。一方のダイキンは、現状では機械、電気や化学の技術者と比較すると、情報系の技術者は多くありません。そこで2020年までに現在100人程度のAI・IoT技術者を1,000人規模に増やすため、社内大学を開設しました。ダイキン情報技術大学と呼んでおり、2018年4月から毎年100人の新入社員を配属。この100人には、テクノロジー・イノベーションセンターの中で、2年間にわたってAI・IoTの技術を学ぶことに専念してもらいます。大阪大学の情報工学の先生方にもお越しいただき、座学や実際にプログラムを組むという実習も行い、修士レベルのAI・IoTの専門性を身に付けられるカリキュラムを学んでもらいます。

2018年は世界的に猛暑でしたが、世界における空調機の普及率はまだまだ低いともいわれています。今後、新興国をはじめ世界中で空調の需要が伸びていく中で、ダイキンは、AI・IoTの技術も取り込んで、より環境に優しい商品やサービスをお客様に届けていくことと、さらなる事業の拡大をこれまで以上に両立させていきたいと考えております。

以上をもちまして、私からのお話とさせていただきます。最後までご清聴ありがとうございました。

ALL DOSHISHA教育推進プログラム “同志社大学ビジョン2025”

— 同志社大学の英語教育と英語民間試験の活用方策と目的 —

同志社大学 学長補佐・文学部教授 **えんげつ 圓月 勝博 氏**



■ リベラルアーツカレッジの志を引き継いだ「良心教育」

同志社大学の圓月と申します。本日は、『同志社大学における英語民間試験の活用方策と目的』を中心にご説明したいと思っておりますが、まずは同志社大学について簡単に説明にさせていただきます。

同志社大学の始まりは1875年に新島襄先生によって創立された同志社英学校です。幕末から明治維新にかけて、学問の選択肢としては、蘭学、漢学、さらに国学、英学などがありました。新島襄先生は、英語を通して世界に新たな日本を発信していくことを目指して、同志社英学校を創られました。

新島襄先生はアメリカのリベラルアーツカレッジのトップクラスであるアマースト大学で学び、日本で初めてアメリカで学位を取った人物です。このリベラルアーツの思想を受け継ぎ、同志社大学は「キリスト教主義」、「自由主義」、「国際主義」の三つの主義をベースとした「良心教育」を建学の精神としています。キャンパス内には新島襄先生の言葉である、「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」を記した『良心碑』が建っており、リベラルアーツ、いわゆる教養教育の伝統を重視した同志社教育の真髄を表しています。

同志社精神は卒業生にも脈々と受け継がれ、2018年7月には、岩波書店より同志社の良心学研究センターの論集が出版されました。さらに8月には、学長である松岡と、OBの元外務省分析官、佐藤優さんの

『いま大学で勉強するということ「良く生きる」ための学びとは』という対談本も出版されました。本の中では、目先の流行に惑わされることなく、若い人たちが10年後、20年後に社会で活躍できる力について議論がなされています。

大学の全体像としましては、学生数は学部生だけで2万7,000人という大規模総合大学です。数年前、新島襄先生の妻の新島八重さんが主人公の大河ドラマ『八重の桜』が放送されましたが、最近では女子学生が1万人を超えたというデータが発表され、嬉しく思っています。今、大学進学率が上がったと言いますが、男子学生の進学率の上昇はそれほど劇的に変化していません。ここ20年ぐらいでは、女子学生の進学率が圧倒的に上がっているのです。同志社大学は、女子学生でも安心して学習できる大学づくりを目指していきたいと思っています。

■ 創立150周年に向けたVISION

本学は2025年の創立150年を控え、今後も新島襄先生の精神を受け継ぐために、2015年に「VISION 2025—躍動する同志社大学—」という中長期計画を策定しました。

VISION 1には「学びのかたちの新展開」を挙げました。これまでの教え込み型、注入型の教育だけではなく、教えることから学ぶことへ展開できるような、新たな教育プログラムを考えていきます。VISION 2で

目標にしています。さらに、グループで取り組む授業内容を多く取り入れ、受信型ではなく発信型への変換として、対話型授業も推進しています。

アメリカの多様性を表現する言葉に「melting pot」と「salad bowl」という言葉があります。アメリカは人種のるつぼ、melting potだと言われていましたが、実際にはsalad bowlだったと言われていました。すなわち、レタスはレタス、トマトはトマト、同じ器に入っているけれど、混ぜてはおらず個々が際立っているという意味です。この言葉は、留学生と日本人学生がともに学ぶ接点を持たない教育体制を持つ多くの大学にも言えることです。留学生と日本人学生が、一つの教室の中で出会う場所を積極的につくるのが、真のグローバルマインドの育成につながると考えています。


■文化芸術創造都市京都を生かしたグローバル教育

グローバル・リベラルアーツ副専攻を修了するためには、2018年に新設したクリエイティブ・ジャパン科目などの併修を義務付けています。クリエイティブ・ジャパン科目の新設には、2013年に設立された同志社の創造経済研究センターが関係します。創造経済研究センターでは、国際と学際をキーワードに基礎研究を進めています。このような研究成果も活用できるようにするのがグローバル・リベラルアーツ副専攻です。京都科目、クールジャパン科目、クリエイティブ・ジャパン科目、そして外国人留学生とともに学ぶ科目という4

文化芸術創造都市の中の教育
グローバルな教養教育の開発

2018年度 全学共通教養科目
「クリエイティブ・ジャパン科目」新設
(全40クラス)

①京都科目
②クールジャパン科目
③クリエイティブ・ジャパン科目
④外国人留学生とともに学ぶ科目



種の科目で構成され、全40クラスあります。

一つ目の京都科目は、京都を観光の面も含めた視点から学びます。京都は世界の観光都市ベストテンに何度も選ばれるほどの観光都市で、学生の数も非常に多く、人口の10%以上が学生です。特徴的な京都の伝統、文化の真髄と普遍的価値、美意識や感性、精神性を理解するとともに、それらが受容性に優れ、広く異質なものを受け入れてきたことを理解することを目的とした科目です。

二つ目には、クールジャパンという科目を設定しました。外国人留学生、特に短期で来る留学生の中には日本のアニメを見て日本に興味を持った方が圧倒的に多くいらっしゃいます。アニメから日本の文化を理解してもらい、話し合う機会などを設ける科目です。

三つ目のクリエイティブ・ジャパン科目は、日本社会のクリエイティビティを高めるための方法を思考し、文化による日本のブランディングについて考察するという科目です。


四つ目の外国人留学生とともに学ぶ科目では、日本の伝統、文化を中心に、外国人留学生とともに学ぶ科目、外国語で行う科目を開講しています。

グローバルな世界だからこそ、ローカルな文化も大切に、そのローカル文化を責任を持って発信する。そして、ローカル文化を発信する手法に、英語や、その他の外国語を視野に入れる。これが、これからの日本にとって大事になるのではないかと考え、取り組んでいます。

また、修了には語学力の到達目標も掲げています。幾つか認めている評価対象がありますが、TOEIC® Listening and Reading Test (以下、TOEIC® L&R)であれば、730点以上を取った段階で単位をそろえれば、副専攻修了としています。TOEFLに関しては550点に設定しています。

これらの数値は、学生としてはかなり高い設定ではありますが、外国長期留学に行けるだけの語学力を育成するということを目標に設定しました。本学は英語民間試験としては、TOEIC® Tests、TOEFL、IELTSを取り入れています。他の試験に関しても今後取り入

グローバル・リベラルアーツ副専攻



①学部横断型教養教育プログラム：規格外の人物の育成
②副専攻科目は英語：「英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ」
③共修環境の充実：salad bowl から melting pot へ
④対話型授業の推進：受信型学習から発信型学習への転換

(i) 「クリエイティブ・ジャパン科目」などの併修
(ii) TOEIC L&R 730点以上
TOEFL ITP 550点以上
TOEFL iBT 79点以上
IELTS 6.0 (overall band score) 以上

れていくことになると思いますが、学部ごとに行っている推薦入試等でも、現在はこの三つの英語民間試験で評価しています。英語教育関係者の間ではIELTSの評価が高く、イギリスの名門大学への留学などには、IELTSの6.0、あるいは6.5を要求されることも稀ではありません。しかし受験機会が少ない、受験料が高いというデメリットがあるため、学生にあまり勧めることができず、多くの場合TOEIC TestsかTOEFLでの評価となります。

■文学部英文学科でのさらなるグローバル化へ向けた教育

国際主義の推進に特に力を入れている学部もあります。私が所属している文学部英文学科は、長年培ってきた伝統を深化させながら、実践的な英語力の習得、専門分野の深い学びを通して、国際的な視野を持ち社会で活躍できる人を育てています。

文学部英文学科では英語4技能を学ぶために、1年



時にSpeaking、Listening、Writing、Readingのクラスが設けられています。2年次では、SpeakingとListeningを統合し、Speaking & Listeningというクラスになります。必修は2年次で終わり、3年次は選択必修の形でSkills in Englishの中から三つ以上のクラスを取ることを求めており、より実践的・発展的な授業をしています。

本学では、春・秋の2回、それぞれ30～40人を表彰する外国語honors制度を設けています。高い目標を設定し、落ちこぼれ対策ならぬ吹きこぼれ対策です。すなわち、高い学力を持つ学生たちが学習目標を見失わないための方策で、ドイツ・フランス・中国・スペイン・ロシア・韓国・アラビア・ヘブライ語も含めた多言語を対象としています。基準は、学部ごとに若干異なるのですが、英文学科では4技能英語科目GPAが3.60以上、TOEIC L&Rが730点以上を設定しています。

また、英語民間試験についても、学科の予算で1年生の春・秋に留学を目的とし、TOEFLを受けてもらいます。2年生の秋になると、キャリア形成支援を意識し、TOEIC L&Rに切り替えます。TOEIC L&Rは、日本の民間企業で標準的な英語試験としてもっともよく活用されていますので、学生にも受験を強く勧めているのです。

英語民間試験受験奨励策
(文学部英文学科の場合)

1年生春学期 TOEFL ITP
目的：留学奨励・自己評価

1年生秋学期 TOEFL ITP
目的：留学奨励・自己評価

2年生春学期 TOEFL ITP
目的：留学奨励・自己評価

2年生秋学期 TOEIC L&R
目的：キャリア形成支援

英語民間試験費用補助



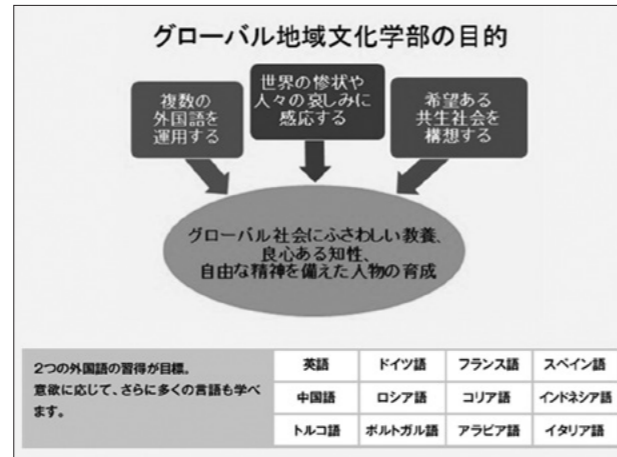
■ グローバル化を進める学部での民間外国語試験への取り組み

2011年に設置されたグローバル・コミュニケーション学部では、変容し続ける国際社会のビジネス、文化交流や教育などの場でFacilitator、Negotiator、Administratorとして活躍できる人材の育成を目標とし、4技能の習得を前提に語学教育プログラムを設定しています。英語コース、中国語コース、日本語コースの三つのコースがありますが、それぞれのコースでビジネスや文化交流も念頭に置いたコースになっています。



4技能のうち、特に教えるのはスピーキングとリスニングですが、Communicative Performanceという、スピーキングとリスニングに焦点をあてた授業を設けています。民間外国語試験の費用補助制度もあり、受験を奨励しています。

グローバル化推進に向けて設置されたグローバル地域文化学部という学部もあります。2013年に、複数の外国語運用、マルチリンガリズム、マルチコンピタンスの育成を目的として設置されました。複数の外国語、各地域の文化・歴史・社会、ディシプリン(専門的アプローチ方法)、具体的トピックやイシューを段階的かつ横断的に学べるカリキュラムを編成しています。12言語から言語を2種類選べるグローバル地域文化学部では、各種の民間検定試験の補助制度を行っており、それぞれの言語に合わせて、民間検定試験を積極的に学生に利用してもらえ環境を作っています。



■ 全学的に深まる多言語教育

文系の学部をピックアップしましたが、同志社では理工系の学部も、日本人学生と外国人留学生がともに学ぶ共修環境をキーワードにした教育プログラムの開発に取り組んでいます。TOEIC Testsに対する関心は理工系の学部のほうが強く、TOEIC Testsの受験率は、理工系と実学系の学部が高いという数値が出ています。また、同志社大学では10年以上前よりCEFRも外国語教育に活用しており、多言語対応ツールとして有用性があると考えています。

この他にも、全学共通教養教育ではIntensive Courses for TOEFLという科目を設置し、専任教員を雇い、TOEFL対応の授業も設けています。2年間英語に向き合えばTOEFLでは550点、或いはTOEIC L&Rではスコア700～800点に到達できるよう、学力の底上げを目指したクラスです。PracticeとTutorialの2種類のクラスがありますが、PracticeはListening, Grammar, Readingの3技能を中心に授業を展開しています。スピーキングが無いということは英語教育として弱いという考えより、Tutorialでは聞く・読むに加え、話す・書く、という発信型の技能にも力



を入れていきます。

正課外では、勉強する目的をはっきりさせるため、学生に夢を与えます。充実した正課外教育プログラムを提案し、留学のためには、TOEFLやIELTSを積極的に受験することを奨励しています。TOEIC L&Rの全学部無料受験を実施していますが、大きな関心を持ってくれる学生と、無関心な学生に二極化しますので、そのギャップを埋めていくことが課題です。

その他、課外授業では、国際ビジネスコミュニケーション協会の方にも直接お越しいただき、TOEIC L&R対策講座を行うこともあります。正課授業以外で磨きをかけたいという学生に、積極的に勉強してもらええる機会をつくるように心掛けています。

■ 真のグローバル化を目指して

最近の学生の考え方は千差万別です。様々な夢を抱いた学生が在籍しており、例えばフランスでCAになる夢を持った学生や京都の文化を発信したいという学生もいます。あるいは、4カ国語を勉強してみたいという学生や、大胆にも「アフリカに住む」という夢を持つ女子学生もいます。

同志社大学は、2015年にこれまであった日本語・日本文化教育センターに、グローバル教育センターを新設して、二つを統合した形で国際教養教育院を新設しました。これもさらなるグローバル化を目指したものです。日本語・日本文化教育センターは、日本語によるグローバル化推進を狙いとしています。長期留学をして日本語を本格的に勉強してくれる外国人留学生を育てるための語学プログラムが充実しています。一方グローバル教育センターは、英語で行うグローバル化を進めてきました。留学生の送り出しに加え、英語で日本留学を経験しようとする外国人留学生の受け皿にもなっています。グローバル・リベラルアーツ副専攻を担っている部署でもあります。

昨年、日本語・日本文化教育センター主催で『グローバル時代に必要なマルチリンガル人材の育成』という

シンポジウムがありました。グローバル化の流れを受け、複数の文化言語の中で育つ子どもが増える中、長年日本で行われてきたモノリンガルの言語教育と多言語文化で育った学生に対する教育の違いがテーマです。日本のTOEIC TestsやTOEFLのスコアは、他国と比較するとあまり高くないと言われています。理由は複数考えられますが、その中の一つに、外国で成功した教育法が必ずしも日本に合うものではないということがあります。母語と外国語の関係性を見定めた上で教育プログラムを作らなければなりません。語学習得には、英語ができるようになるとドイツ語を学ぶ際にも学習能力速度が高まるというような、相乗効果があります。外国語と母語の関係性を学術的に、データに基づいて分析し、適切な教材や教育法を開発していけば、学習効果も上がっていくのではないかと語学教育の考え方もあります。

昨今、英語教育に関して様々な極論が出ています。伝統的な英語教育を頑なに守ろうとする人も見られずし、英語教育の全てを新しい方法論で革命的に刷新しようと思気込んでいる人もいます。しかし、どちらの方法が正しいかという白黒をつける発想ではなく、学生の個性を伸ばしていくという目的を見失わないことが、教育においては一番大事なダイバーシティの考え方なのではないでしょうかと思います。千差万別の学生に対応していける千差万別の教育プログラムを作っていくことが、これからの大学にとって求められるものではないかと思っています。

グローバル技術者養成プログラム における英語教育

— TOEIC® Programと未来のグローバル技術者を結ぶ
CLIL活用型授業実践事例の紹介 —

山口大学 大学院創成科学研究科・准教授 兼 工学部附属工学教育研究センター・
語学教育強化室長

植村 隆 氏



■ “Go Global Japan” をきっかけに 行った英語教育の改革

山口大学 工学部 工学部附属工学教育研究センターにて語学教育強化室長をしております植村隆と申します。

今日は、グローバル技術者養成プログラムにおける英語教育、TOEIC® Programと未来のグローバル技術者を結ぶCLIL活用型授業実践事例をご紹介します。私自身が現場の英語教員でありますので、模擬授業的な要素を織り込みながら発表させていただきます。

山口大学工学部の英語教育が変わった大きなきっかけは、2012年に採択された、文部科学省のグローバル人材育成推進事業、現在の“Go Global Japan”（経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）でした。このプロジェクトは経済社会の発展を牽引するグローバル人材の育成を目指したもので、大学を対象とした補助事業です。全国で42大学が採択になりましたが、本学は工学部が単体で採択されました。

構想調書の中では、グローバル技術者養成プログラムの構想として、学生には揺るぎない工学の専門性をしっかりと身に付けてもらった上で、プラスアルファとして、2本の柱を立てることとしました。国際的視点の涵養・自己研鑽力向上のカリキュラムと、語学力向上のカリキュラムという二つの大きな柱を付与することで、グローバル技術者を養成していく構想を立てました。

■ 工学部特別強化学生認定制度で学生の意識涵養を図る

グローバル技術者養成プログラムにおける英語教育では、山口大学工学部なりの語学のエリート教育というものを展開してきました。具体的に四つポイントがあります。

まずは、年2回の工学部特別強化学生認定制度です。本学は、学部を問わず1年生のときに、TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) 団体特別受験制度 (IP: Institutional Program、以下IPテスト) を全学生が受験することになっています。Go Global Japan採択当時は、毎年6月、現在は毎年2月に開催しています。その中で、TOEIC L&R IPテストのスコアが450点以上の工学部生1年生全員を工学部特別強化学生とし、夏と冬の年2回認定式を行っています。この認定式では、学生たちが、将来グロー

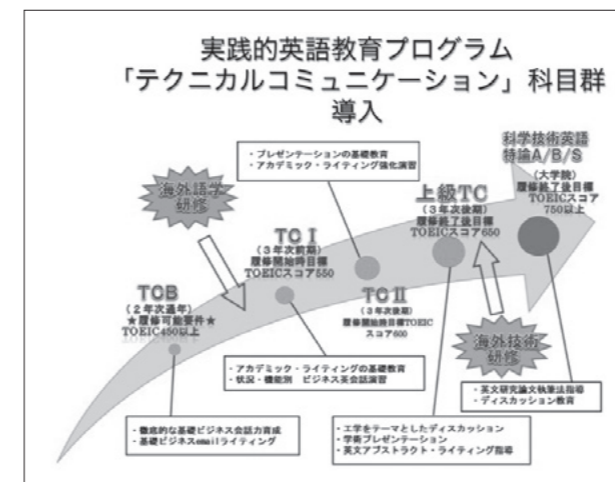
グローバル技術者養成プログラム における英語教育 ～ 語学エリート教育 ～

1. 工学部特別強化学生認定制度
2. 実践的英語教育プログラム
「テクニカルコミュニケーション」科目群導入
3. オリジナル語学教材開発とLMSの活用
4. CLIL教授法を活用したビジネストピックと
TOEIC Programの「融合型学習」授業実践

バルに活躍するエンジニアの候補であるという意識を涵養するきっかけとなるイベントを展開しています。

次に、プログラムに関しては、時代が求める実践的英語教育のプログラムをスタートする必要があるということで、「テクニカルコミュニケーション」科目群を設計、導入しました。これらの科目群は、完全なる専門選択科目ですので、先ほど申し上げました特別強化学生全員がこの科目群を受講するわけではありません。自ら自己研鑽力を上げたい、語学力を向上させたいと思った学生のみが受講します。

本プログラムでは、まずは2年次に通年で、徹底的な基礎ビジネス会話力を育成する、テクニカルコミュニケーション基礎 (Technical Communication -Basic- 以下、TCB) という科目を受講してもらいます。これは、コミュニケーションの中で、ビジネスをコンテンツとした英語を徹底的に育成していく授業です。3年次に上がりますと、前期にはテクニカルコミュニケーション I、後期にはテクニカルコミュニケーション IIとして、ネイティブスピーカーの専任教員の指導の下、アカデミックライティングの基礎から、リテラシーを上げるような英語力の向上を目標としております。そして、最終的には、上級テクニカルコミュニケーションという科目で、工学をトピックにしたディスカッションやプレゼンテーションができるようになるレベルを目指した授業を行います。この上級テクニカルコミュニケーションは、カリキュラムの都合上、4年生の後期に受講する学生が多くなっています。



■ オリジナル教材の開発で授業の予復習を行う

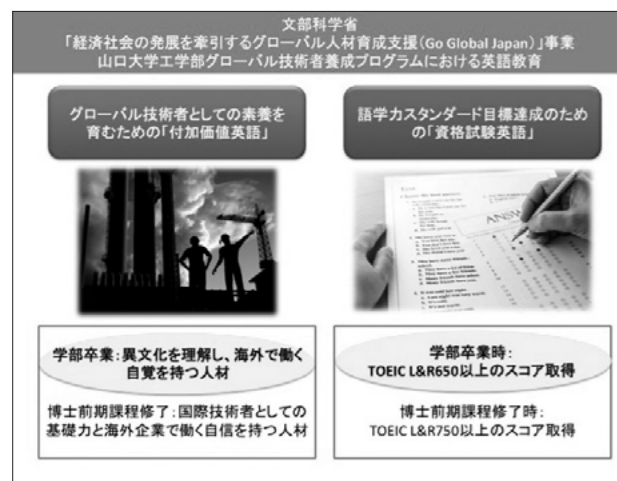
オリジナル語学教材の開発も行いました。テクニカルコミュニケーション科目では、国際語としての英語という意識を工学部生にも持ってほしいという趣旨の下、多国籍の専任教員を配置しました。スコットランド出身のネイティブスピーカー英語教員、ポルトガル出身でITエンジニアとして実務および研究職を務めてきたエキスパート、それから私の3人です。それぞれの専任教員がテクニカルコミュニケーション科目群を担当し、授業用のオリジナル語学教材開発として、テキストコンテンツを開発しました。テキスト開発したものは、学内ラーニング・マネジメント・システムのMoodleに全てアップロードしてあります。また、2年次のTCBに関しては、予復習用の教材としての音源教材の開発も行いましたので、それも全てMoodleにアップロードしました。このように、学生には、スマートフォン、あるいはタブレット端末があり、インターネット環境やWi-Fi環境さえあれば、いつでもどこでも授業の予復習ができるという環境を提供してきました。その結果、年々学食で食事をしながらイヤホンをして、英語をつぶやいている学生を見かけるといった機会が増えました。

■ ビジネストピックとTOEIC® Program を融合した科目内容

最後のポイントは、CLIL教授法を活用したビジネストピックとTOEIC® Programの「融合型学習」授業の実践です。

“Go Global Japan” 構想調書では、どのような英語力、英語の資質を伸ばすのかという英語教育の狙いも設定しました。

1点目は、グローバル技術者としての素養を育むための付加価値英語。もう一つは、TOEIC L&R IPテストのスコア650点以上の人材を育てることを目標とし



た資格試験英語です。この両者をどうやって達成するかが、専任教員の初めのチャレンジでした。検討した結果、CLIL (Content and Language Integrated Learning) をすべきなのではないかという結論に達し、「融合型学習」と打ち出しました。CLILとは内容言語統合型学習という、授業の内容と言語の同時習得を目指す教授法です。ヨーロッパで始まり、“Go Global Japan” が開始してから、日本でもやっと認知が広がりはじめた、比較的新しい教授法です。

我々が言うところのコンテンツとは、グローバル技術者として遭遇し得るビジネス関連トピックです。そして、言語のほうはTOEIC Program 関連英語ということになります。TOEIC L&Rのコンテキストはビジネスですので、このビジネス関連のトピックとそれに関する英語を同時習得するという事は、非常に密接な関係があることとなります。

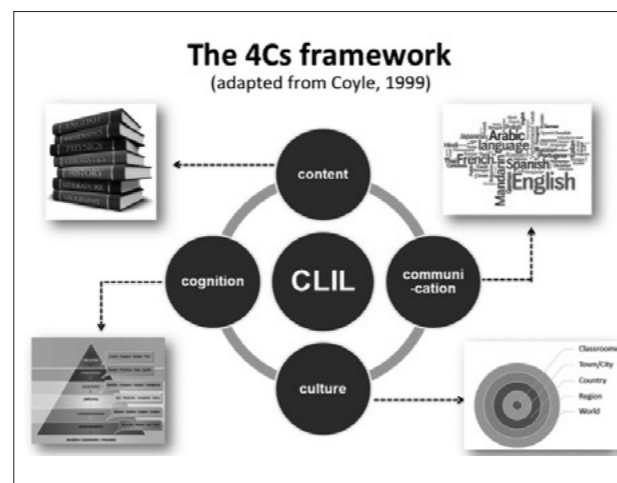
■ CLIL教授法における四つのC

まずはCLILの理念を簡単に説明したいと思います。CLILのレッスンを作成するとき、こういった要素を入れていけばCLILになるのかというところは迷うことがあると思いますが、CLILのレッスンには四つのCが重要になると言われています。

まず一つはContent、いわゆる内容の部分です。本学ではグローバル技術者として遭遇する

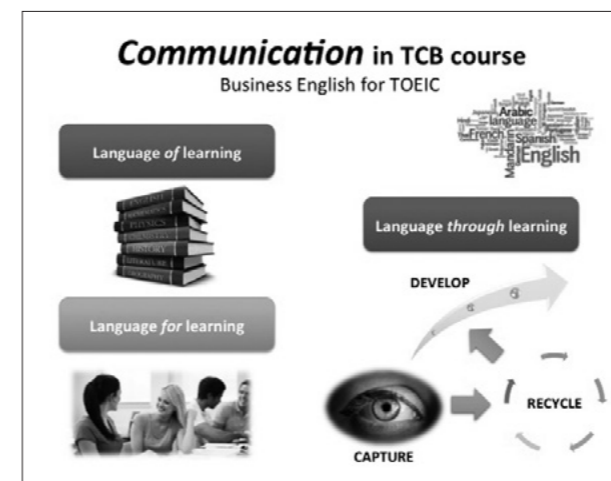
であろうビジネス関連トピックを指します。次は、Communication。CLILにおけるCommunicationは、Languageと同義語で使っておりますので、本学工学部でいえば、TOEIC L&R 関連英語ということになります。そして三つ目のCは、Culture。信ぴょう性の高い教材、本物の教材を使うことによって、異文化を感じてもらい、異文化の理解につながる教材を使って、異文化を理解してもらい。それだけではなく、学生一人ひとりが持つ文化をCultureとし、一人での学習よりもペア、ペアよりもグループ、グループだけではなく全クラスでの学習というように、文化が異なる人間が集まった大きなコミュニティの中で英語と内容を学習していくのが、CLILのCultureの部分です。

最後のCognitionは、いわゆる暗記型の学習で理解した項目を暗記で止めるのではなく、もっと高い次元での思考を養いましょうというものです。



■ 山口大学工学部におけるCLIL教授法を利用した授業内容

CLIL教授法を活用したビジネス関連トピックとTOEIC Programの「融合型学習」授業の実践として、まずはTCBのコースでCLILを導入しました。TCBコースの中での四つのCも設定しました。ContentのCは、ビジネス関連トピック、CommunicationのCは、TOEIC L&R向けのビジネス関連英語です。



CommunicationはLanguageと同義語ですが、そのLanguageに、三つのLanguageを設定しました。一つは、Language of learning、ジャンル特有の言語、もしくは専門用語です。次にLanguage for learning、学習するための言語です。新しい言語アイテム、項目を習得するには、スキルが必要です。そしてそのスキルを英語で述べなければ、新しい英単語の習得に結び付かないこととなります。例えば、ペアワークやグループワークの際、クラスメイトに言われたことが不明瞭であった場合、もう1回聞き直して、クラスメイトが言ったことを明確化したい場合に、“Are you saying that...”などと、学ぶための表現がさっと使えるかどうか。さらに、それを聞いたクラスメイトが、“What I meant to say is that...”というような表現を使って言い返せるかどうかなどが、Language for learningの要素の一つかと思えます。三つ目の要素はLanguage through learningという考え方です。1回の授業で紹介した英語項目を全部習得するということは非常に難しいと思います。そこで、学習者と教師が連携し、戦略的に学習者にその英語の項目を把握させる。そして、それを授業、コース全体の中で何回かRECYCLEさせ、最終的にその言語を自分で発展的に使えるようにシラバスを設計していくという考え方です。以上、三つのLanguageの要素が成立し、Communicationとなります。

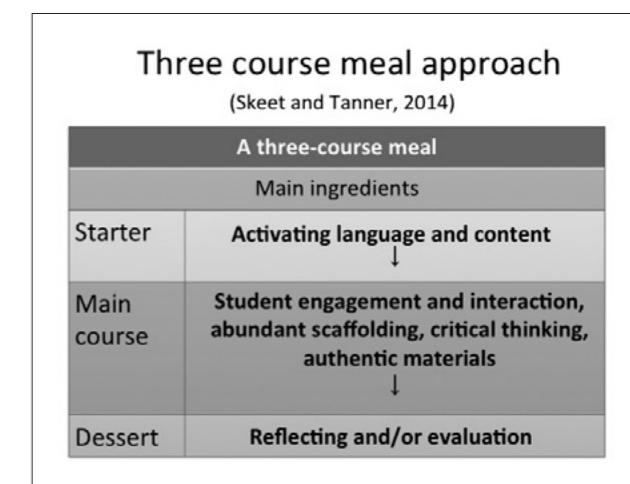
次に、三つ目のCはCultureです。CLILというCultureはAuthenticityという言葉がキーワードにな

ります。簡単にいえば、本物の教材を活用していくということです。TCBコースの場合は、本物のアニュアルレポートを活用して学習者のモチベーションを高めたり、感動を与えたり、異文化理解につなげるという試みを行ってまいりました。もう一つのAuthenticityとしては、教員の言葉も当てはめることができます。例えば、私は個人的に国際ビジネス現場での実体験がありますので、何かビジネスの専門用語が出てきたときに、自分が現場で感じた体験談を織り込みながら、学生に説明しています。学生が納得し、理解してくれば、ちょっとでも英単語、専門用語を覚えてもらえるのではないかと期待しております。

四つ目のCであるCognitionは、暗記して理解するだけではなく、その知識をさらに発展させて高次の思考を鍛えましょうというのが、CLILの理念の一つです。TCBコースの中では、複数の企業の英語のアニュアルレポートにオンラインでアクセスさせます。そして、学生たちが自分なりの分析・評価をし、どの企業で働きたいか、なぜ働きたいかということを考えてもらいます。

■ TCBにおけるCLILを使用したレッスンの流れ

TCBにおけるCLILのレッスンとして、学生にも人気のあるThree course meal approachというフレームワークをご紹介します。



最初は、Starter。学習者が知っている言語知識やトピック、知識を脳内でアクティベートさせましょうという試みです。

まずコンテキストを把握させるということがスターティングポイントとなります。このコンテキストを把握した後に、次のレベルに進みます。

次のMain Courseではまず、Starterで学んだ単語や把握したコンテキストと学生たちの知識のリンク付けを行います。また、学生たちがアクティビティに専念できるように、教師は、学生間の英語でのコミュニケーション促進をしなければなりません。ここでは authentic materials、本物の教材を使いながら異文化理解を促進するという側面がありますが、いきなり本物の教材を見せると難しいため、教師の scaffolding、いわゆる足場掛けが必要となります。なお、Main Courseでは、TOEIC L&Rのパート1にある写真描写問題がトレーニングとしても活用できる内容が多く、マルチプル・チョイスのアクティビティも意識して取り入れています。

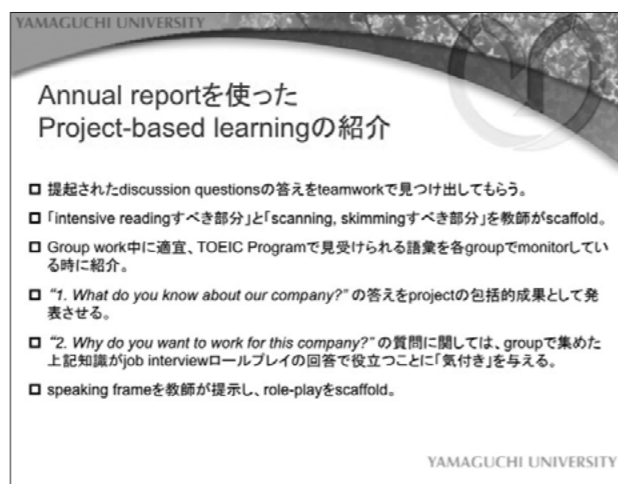
高次の思考を養いたいというのがCLILの理念の一つですので、自分自身にWhyを3回は問い掛けさせるくらい、クリティカルに考えてもらいます。このパートはTOEIC L&Rのパート3と4の試験対策にもつなげられるため、大体10秒程度で幾つかの質問に対する自分の答えをまとめられるよう訓練します。

次のDessertでは、授業開始直後に学んだ単語や知識を振り返ることができるような質問を設定しています。

■ 実際のアニュアルレポートを利用したカリキュラム

それでは実際に、アニュアルレポートを使用してどのように一つの授業を進めていくかをご紹介します。

導入部では、誰が何をしているかという把握や基本的な単語を学生にまず理解してもらうため、今回はビジネスにおける部署ごとの絵と部署名を書いたものを



使います。コンテキストの把握として、「2人の男性は何をしているところでしょうか？」などと非常に簡単な問い掛けから始め、各部署ではどのような仕事が行われているのかペアで話し合ってもらいます。ここでは現在持っている知識も同時に掘り起こすことを目的としています。

次に、会社内の部署名にはどのようなものがあるのかを英語で紹介し、先ほど推測したコンテキストの内容と紐付けていきます。こちらはLanguage of learningに当たります。その上で、ダイアログを作成し、音声を流してリスニングも強化しつつ、学んだ単語をそこで使わせます。これがいわゆるLanguage through learningの要素となります。このダイアログには、これまでの授業の内容を網羅し、さらに次のステップにつながるようなダイアログを作成しています。

次のステップでは、ある企業に面接に行く場合、どんな情報を最低限調べておくべきかという質問を学生に投げかけます。TCBを受ける学生たちは2年生なので、まだ企業の面接などには行ったことがありません。給料や休暇、福利厚生に関して聞きたいという意見が出ます。そこで、今後のdiscussion questionsとして、その企業が何をしているのか。何をして収益を上げていて、どんな強みをマーケットで持っているのか。CEO、Presidentは誰で、企業理念はどんなものなのか。そして、これらの知識を得た結果、なぜその企業に魅力を感じたかということくらいは言えたほうが良いのではないかと質問をします。

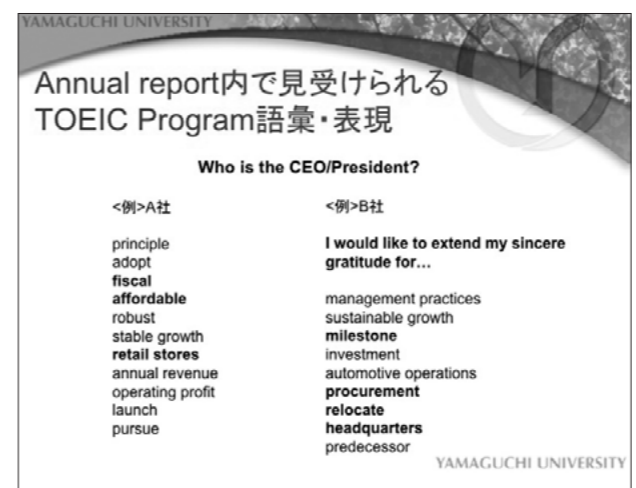
このような質問を通し、学生たちに企業に対しての疑問を抱かせた上で、今までの疑問に答えてくれる媒体であるアニュアルレポートの存在を伝えます。

学生の多くはアニュアルレポートを初めて目にしますので、どこを読めば良いのか、どんな情報が載っているのかは、教師から説明を加えながら紹介していきます。

授業では、多くの学生が興味を持っていそうな企業のアニュアルレポートを紹介します。例えば、ユニクロの世界戦略が載っているページを紹介し、ユニクロが成功した流れや現状を教えます。そこで中国でもこの年はナンバー1だったとか、北米やヨーロッパでも成功しているなどの説明をすると、学生たちは非常に面白そうな反応を見せます。他にもTOYOTAのアニュアルレポートを紹介することもあります。TOYOTAというと自動車を作っている印象が強いようですが、住宅関連の事業や船舶関連の事業もやっていることが分かります。学生たちは非常に驚き、アニュアルレポートって面白いと思ってくれるようです。

■ 高次の思考育成を目指した質問

このように学生たちの興味を引いた後で、再度、discussion questionsについて考えてもらいます。アニュアルレポートに載っていることは伝えましたが、本物の教材ですので学生たちが読み解くことは当然難しいはずで、intensive reading、集中的



に精読していく部分と、scanning、skimmingすべき部分というのを、教師のほうから足場掛けをしてあげます。グループワーク中は、教員が適宜クラスを歩いて回って進捗状況を確認しています。グループごとに進捗状況が異なるため、そのグループに応じた必要な情報を紹介します。

アニュアルレポートはビジネスに関するレポートですので、TOEIC L&Rで頻出する単語などがよく使われています。そこで、授業に使っているアニュアルレポートの中に出てくるビジネス単語のうち、TOEIC L&Rでよく出る単語をリスト化し、生徒たちに展開します。学生たちには、アニュアルレポートというのは、「ほんとうにTOEIC L&R関連用語の宝庫だよ」と伝えています。

それぞれのグループのdiscussion questionsの調査が終われば、包括的成果として、“What do you know about our company?”という問いに対する答えをプレゼンテーションしてもらいます。CLILに関しては、高次の思考育成を行うことが学習目的となるため、“Why do you want to work for this company?”というような質問をし、ペアワークでロールプレイをやらしてもらいます。一人の学生が面接官の役であれば、もう一人の学生は面接を受ける学生の役になってもらい、“Why do you want to work for this company?”という問いに対して、プレゼンテーションのために得た知識を使いながら、自分のアイデアを交えて自由に会話してもらってアクティビティも行っています。

本学にはTOEIC L&Rの様々な得点層の学生がいますので、こういったspeaking frameを見せながら、足場掛けを必ず行っています。学生たちには、自分が思ったことと、調べたことを混ぜながら、ペアワーク、ロールプレイをしてもらい、最終的に自分の考えと授業で得た知識を合わせて明確な意見が言えるようになってもらうことが目標です。

■ 授業の振り返りまでをレッスン内容に含める

ここまでがMain Course、ポディーにあたる部分でした。最後に、CLILでは、授業の振り返りをします。簡単にご説明しますと、Classroom Reportとして三つないしは四つの理解度チェックの質問紙を用意し、振り返りを行います。ノートや教材などが机の上にない状態にして記述してもらいます。自由記述ですが、授業でどう思ったかということも書いてもらっています。自由記述は日本語でも英語でもどちらでも良いことになっています。その中から多かった意見をいくつかご紹介します。

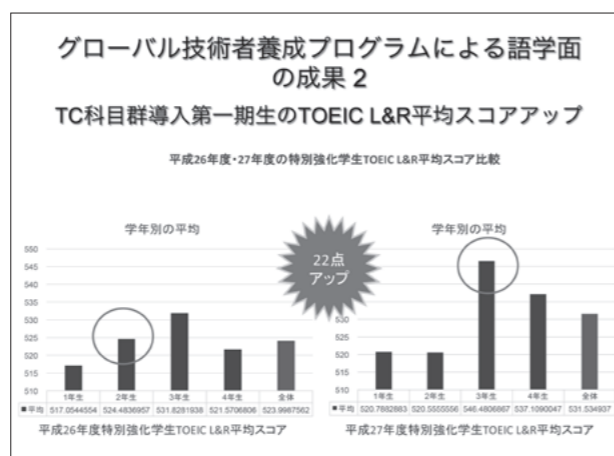
Authenticityに関するmotivationの意見としては、「ユニクロの資料を実際に見ることができて感動しました」「アニュアルレポートという言葉が初めて聞いたので、新しい情報を知られて良かった」などがありました。また、「自分で調べてそれを英語にまとめる授業がとても楽しく感じました」というようなTaskに関するmotivationも見られました。それから、「面接で調べておくべきことは、日本語での面接でも役立つそうです」といったContentに対する満足度や有用性を述べたコメントもありました。「他の授業との関連性の利点という面では、山口と世界という授業を受講した後だったので、今回の授業とつながってよく身に付きました」という意見をくれた学生もいました。



■ “Go Global Japan” を経た山口大学工学部の英語教育の現状

このテクニカルコミュニケーション科目群は、完全なる選択科目での開講だったにもかかわらず、TCBに関しては初年度28人だったところ、4年後の2016年には98人まで受講者数が増えました。3年次以降開講の科目も、一番多いときには30人ほどの受講者を受け入れることができました。

また、TOEIC L&R IPテストのスコアで見ると、第1期生の平均スコアは、2年生から3年生に上がる時に22点アップしました。また、TOEIC L&R IPテストでスコア650点以上を取れる学生も年々右肩上がりです。35人輩出できました。このような成果もあり、“Go Global Japan” が終わった後には、学部を問わず4年生からTOEIC L&Rスコア600点以上の学生を半数以上輩出するという目標が設定されました。



また、共通教育の英語教育が変わりました。1年次に取得する英語教科は6単位から8単位、4科目と変更し、1年次終了時には学部を問わず、全学生の50%のTOEIC L&Rスコア500点以上取得という数値目標を設定しました。

工学部に関しては、2017年度入学者から、7学科のうち機械工学科と応用化学科の2学科が学部2年次の英語を必修化することが決定しました。そして、これまではTOEIC L&Rスコアが450点以上の学生しか受けられなかったところを、450点未満の学生にも英語

授業の機会を年間で提供することを開始いたしました。以上で本学工学部からの発表とさせていただきます。

参考文献: Coyle, D. (1999) "Theory and planning for effective classrooms: Supporting students in content and language integrated learning contexts," In Masih, J. (ed.), *Learning through a foreign language*, London: CILT, (pp. 46-62).

Skeet, J. and Tanner, R. (2014) "Aiming for CLIL," *CLIL Magazine*, Fall Edition, (pp.18-19).

TOEIC® Programの全学導入とその効用、および国際学部における先進的な取り組みと海外留学の成果



藤原 尚氏 藤田 直也氏

第1部
近畿大学のグローバル化の現状とTOEIC® Programの全学導入とその効用
 近畿大学 インターナショナルセンター担当副学長・理工学部長
藤原 尚氏

■実学教育と人格の陶冶を目指す教育

近畿大学インターナショナルセンター担当副学長と理工学部長を務めております、藤原でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず私から近畿大学のグローバル化の現状、TOEIC® Programの全学導入とその効用についてお話しさせていただき、その後、国際学部学部長代理の藤田先生から、国際学部の中で英語教育を実際どのように進めているか、という流れでお話しさせていただきます。

はじめに、近畿大学の概要についてお話しさせていただきます。近畿大学は、1949年に世耕弘一先生によって、大阪専門学校と大阪理科大学を合併し、新しい大学となりました。大阪専門学校から数えると、2025年に100周年を迎えます。建学の精神は、「実学教育」と「人格の陶冶」としています。この精神が、現在日本でもブームとなっている近大マグロを生み出しました。近大マグロは、ここグランフロント大阪の水産研究所でも召し上がっていただけますが、1970年より水産研究所がマグロの完全養殖を開始してから実際に市場に出すまでは、時間と労力がかかりました。

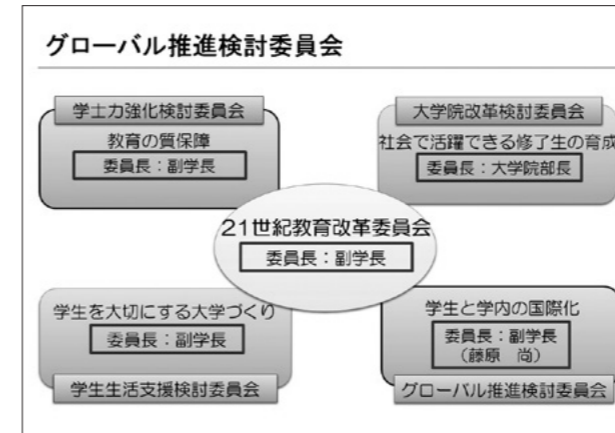
この成果は我々近畿大学の実学教育ゆえのものであると考えています。また、人格の陶冶については、人と人との交流が多様な価値観を認め合えることにつながると考え、学生たちが交流を持てる場を作りだすことを考えています。その一つが、国際学部の設立につながりました。その話は後で述べさせていただきます。

■グローバル推進検討委員会を立ち上げ、国際化のビジョンを制定

現在、近畿大学には14の学部があります。キャンパスは福岡、広島、和歌山、奈良、大阪狭山、そして国際学部や理工学部のある東大阪にあり、西日本一帯に合計六つ構えています。文系と理系の学生数は大体半々で、バランスの取れた大学になってきました。最近、女子学生が以前より増えてきている傾向にあります。

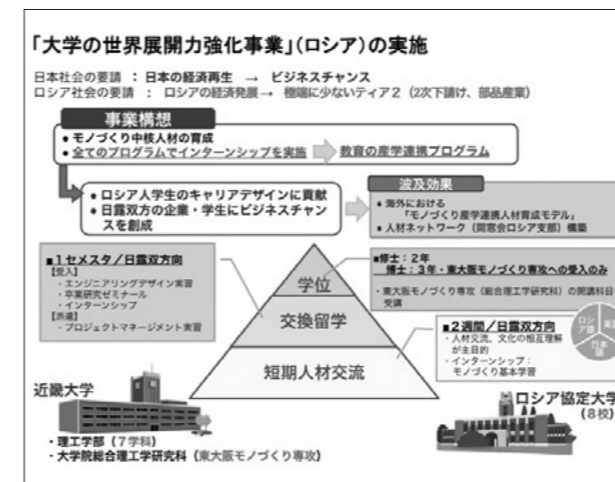
近畿大学は、研究においても各学部で独創性の高い内容を進めていますが、数年前は国際学部もなく、グローバル化については後れを取っていました。そこで、2006年に「学生を大切に作る大学づくり」と「教員の教育力の向上と自己刷新」を目標に掲げ、「21世紀教育改革委員会」を発足しグローバル人材育成強化を検討してきました。ここで策定された「近畿大学国際化のビジョン」に基づき、2014年にはグローバル推進検討委員会が設置され、2016年に14番目の学部となる国際学部の開設が実現しました。

以上が、これまでの近畿大学のグローバル化の背景となりますが、本日は現在進めているグローバル化推進のための取り組みを三つの視点からご紹介いたします。



■モノづくりの強みで世界との交流を図る

一つ目は、「大学の世界展開力強化事業」についてです。大学の世界展開力強化事業とは、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指し、日本人学生の海外留学と外国人学生の戦略的受け入れを行うという、文部科学省が掲げたプログラムです。対象国にはインドや中国、韓国など様々な国がありますが、近畿大学は対ロシアの大学の世界展開力強化事業において、昨年度選定されました。選定された事業内容は、日露間で活



躍できるモノづくり中核人材の育成です。近畿大学とロシアの協定校が、学部から大学院にわたる学生交流に5年間継続して取り組むというものです。

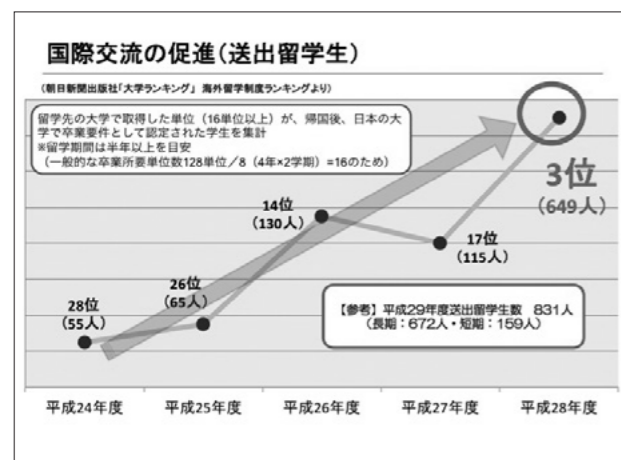
当学において「ロシアと大学の世界展開力強化事業」を進めていくのが、理工学部と大学院総合理工学研究科です。ロシアは、物理学や数学に強く、モスクワ大学やサンクトペテルブルグ大学の先生の多くが物理学でノーベル賞を受賞されています。また、サンクトペテルブルグ大学に代表されるように、国際的な大学が集まったプログラミングの世界大会もあり、我々の協定校であるITMO大学は何度もゴールドメダルを獲っています。このことから分かるように、ロシアはファンダメンタルな分野に強い国です。

一方、近畿大学は世界的に見ても日本の強みであるモノづくり分野に力を入れており、これまでも様々なプロダクトを世に出してきました。例えば、我々の大学院には総合理工学研究科に東大阪モノづくり専攻という修士課程があります。東大阪モノづくり専攻では、学生が月曜日から木曜日までは東大阪の企業で実習を行い、実学的な学びを体験します。そして、金曜日、土曜日は大学院にて、各教授のレクチャーを受け、学びを蓄積しています。このような、双方の国が持つ強みを生かした事業を目指しています。

実際のプログラムは、まずは相互理解を目的とした2週間の日露双方向の短期人材交流が始まっており、次の段階となる1セメスターの交換留学に関しても、2日前に理工学部の学生がロシアのITMO大学へ出発しました。さらに、ロシアの協定校の学生が、近畿大学の総合理工学研究科東大阪モノづくり専攻に来て、モノづくりを学ぶという学位プログラムを設けています。これらのプログラムは全てインターンシップを行うことができ、日本とロシア、双方の企業や学生にビジネスチャンスを創成して、ここから将来を担う新しい人材をつくっていくことを目指しています。

■ 留学生送出数の増加に伴いTOEIC Bridge® Testを導入

次に、国際交流の状況をご紹介します。今は48カ国、238校との国際交流が進んでいます。交換留学生受け入れに関しては、2018年度に97人となり、協定校の増加に伴い、近畿大学に訪れる交換留学生の数も増えています。交換留学生の受け入れ状況につきましては、以前はアジアからが多く、最近ではヨーロッパからの学生が増えています。朝日新聞出版社が出版した、「大学ランキング」の海外留学制度ランキングでは、2016年度に留学生を649人送出したところ、日本の大学の中で3位となりました。これは留学先の大学で取得した単位(16単位以上)が、帰国後、日本の大学で卒業要件として認定された学生を集計した数字です。なお、留学期間は半年以上を目安としています。2017年度には送出留学生数は831人となり、更に派遣した学生が増えました。



このように、大学がグローバル化を進めていく中で、人と人が交流するときに何が大事かを考えると、やはり言語が非常に重要になります。その言語の基礎となるのは英語です。これから学生に英語の重要性を理解させ、英語を使えるようになってもらうために、新入生に対して行うプレースメントテストとして、2017年度からTOEIC Bridge® Testを導入しました。現在は12学部、約7,000人の規模で行っております。

■ 高大連携のためにTOEIC® L&R を使用

各学部のカリキュラムや学内の外部試験にTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R)を使用した理由には、社会的な認知度も高く、就職にも有効に働く連動性がありました。それだけでなく、高大連携の強化のためという点も大きな理由です。高校、大学で共通の外部試験を受けることで、高校生が大学に入学した後も我々が語学教育を進めやすく、また、学生たち自身も入学後の語学教育をスムーズに受けられるようになることを目指しました。

TOEIC Bridge® Testの全学導入とその効用

新入生プレースメントテストTOEIC Bridge®の全学®導入

【選定の理由】

- ①各学部のカリキュラムや学内の外部試験にTOEIC® L&Rを使用
- ②社会的認知度が高く就職に必要なTOEIC® L&Rへの連動性も期待
- ③高大接続の強化(附属特別推薦の出願資格)

※英学部・国際学部・医学部を除く

結果としては、この2年間でTOEIC Bridge Testのスコアが130点超えの学部が3学部から6学部に倍増し、全12学部でReadingスコアが前年度超え、また12学部合算のトータルスコアは3.5ポイントアップしたという結果も出ました。

TOEIC Bridge Testの受験を学生に認識してもらい、ひいては語学の重要性、英語の重要性を理解してもらえたことが、これだけの成果を生み出し、英語コミュニ

TOEIC®の全学導入とその効用

新入生プレースメントテストTOEIC Bridge®の2カ年比較

- ✓ Totalスコア130点超えの学部が倍増(3学部→6学部)
- ✓ 11学部でTotalスコアが前年度超え
- ✓ 全12学部でReadingスコアが前年度超え
- ✓ 12学部合算はListening, Reading, Totalすべて前年度超え

Totalスコア
3.5ptアップ

全学的に入学者の
英語コミュニケーション基礎力が向上

※出典:IBC「2017年4月及び2018年4月の学部別及び12学部合算Score Data Checkup」より

ケーション基礎力を向上させることにつながりました。

また、全学導入したことにより、学部間の英語力の比較が容易に行われるという利点もあります。これは、英語教育を改善していくための各学部間での議論に非常に有用です。それから、TOEIC Bridge Testを行うことによって全学的なデータを蓄積することができ、入学から卒業までの英語力の把握が可能になり、今後の英語教育への取り組みにも使えます。TOEIC Bridge Test導入の効果は年々高まっている状況です。

それでは、次に近畿大学が国際化を目指して新しく開設した国際学部の教育について、これから藤田先生にお話ししてもらいます。

第2部 国際学部の取り組みとTOEIC® Program から見る海外留学の成果

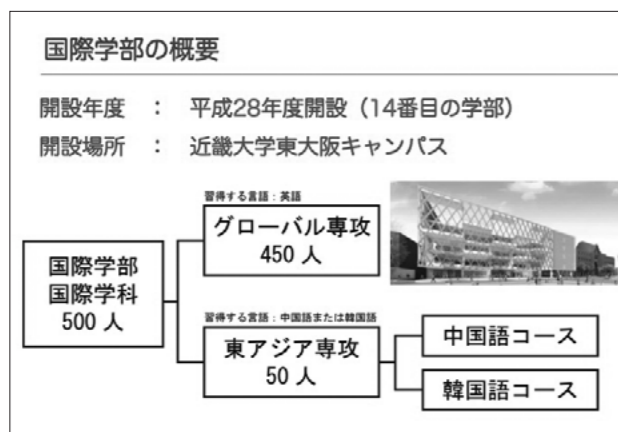
近畿大学 国際学部長代理
藤田 直也 氏

■ 近畿大学国際学部の設立目的

近畿大学国際学部の藤田と申します。本日は近畿大学で3年前に開設しました国際学部について説明させていただき、また、指標としてどのようにTOEIC® Testsを活用し、どのような成果が出ているのかをお話ししたいと思います。

まず、国際学部の開設の狙いをご説明します。近畿大学は学生数3万人強の大学ですが、高校生対象の近畿大学に関するアンケートでは、国際化に対しては遅れているような印象があるとのことでした。大学にいる我々も同様の意見を持っており、今後国際化を牽引していく大学になるには、国際学部の新設が効果があるのではないかという解に辿りつきました。

そして、国際化を牽引していく新学部開設にあたっては、従来の国際系の学部によくあるような国際関係系や、外国語中心の学部とは少し異なる国際学部を作りたいと考えていました。その特色として掲げたのは、語学力、コミュニケーション力の育成、また、国際教養人の養成です。英語による授業展開と、1年生後期からの1年間の留学プログラムの必須化、それから、ベルリッツコーポレーション(以下、ベルリッツ)と連



携協力したグローバル人材の育成です。基本的に、語学を学ぶことが目的ではなく、語学を使って何かをするということが大きな特徴になります。語学力を上げることはスタートラインであり、ゴールではないという考え方です。

■ 「1年生から、全員留学」を実施するために

国際学部は1学科、2専攻としました。450名の学生がグローバル専攻として英語を専修し、50人の学生が東アジア専攻として中国語、韓国語を学んでいます。

今回近畿大学はベルリッツと業務提携をして、カリキュラムの中にベルリッツのメソッドを入れること、そしてベルリッツのグループ企業であるELSとの連携を決断しました。ELSは、アメリカ最大手の英語教育機関であり、海外の大学に留学するための準備機関のような位置づけです。国際学部ではELSの先生20名ほどに毎年1年生の前期にお越しいただき、週に13.5時間ほどの英語の授業を行っています。単に英語の集中講座ということではなくて、ELSのメソッドを使い、1年生の前期に後期から始まる留学に備えた英語教育を継続的に行っています。

また、留学から帰ってきた後にはベルリッツの様々な授業を受けてもらいます。例えばプレゼンテーションや、交渉、ディベート、ディスカッションスキルを伸ばすようなベルリッツのノウハウを生かした科目を2年生の後期から設置しています。これらの授業はビジネススキル中心となりますが、学生たちは留学経験でプレゼン能力や自己発信能力を高め、このような授業を受ける力がすでに付いているという前提で行っております。

先ほどもご紹介したように、1年生からの全員留学が最も重要となります。留学まで1学期間しか準備期間がありませんので、留学に関する実務的なことや英語の準備を扱うクラスを1年生の前期に集中的に開講しています。

ELSはほとんどの学校がアメリカにあるため、本学

ベルリッツコーポレーションとの連携協力

近畿大学 × **Berlitz**

- 幅広い分野の科目で語学力を育成
- 4年間を通してのキャリア教育
- 充実の施設設備
- 世界約75の国・地域にある550のランゲージセンターで学習
- 50年を超える大学のキャンパス内にELSセンターも設置

ELS	1 年次～2 年次前期の 留学前、留学中のアカデミック英語習得システム 留学中の安全管理での連携
Berlitz	2 年次後期～4 年次の ビジネス英語や交渉、自己表現力を学ぶ グローバル人材育成カリキュラム

の留学先はアメリカだけです。ELSは、アメリカの大学内に附設されているので、我々はELSとの提携のみならず、アメリカの大学とも協定を結んでおります。今年提携校が約30校あり、平均15名ほどが各大学に行く計算です。

ELSのプログラムとしては、入学式の日全員4技能のプレイスメントテストを受け、101～112という12レベルのうち、いずれかのレベルに分けられます。そこで105～106に入った学生は留学先で1月からの1セメスターで正規の授業を1科目、107以上のクラスに入った学生は、全科目を取ることができます。

■ 留学前後の英語力をTOEIC® L&Rで測定

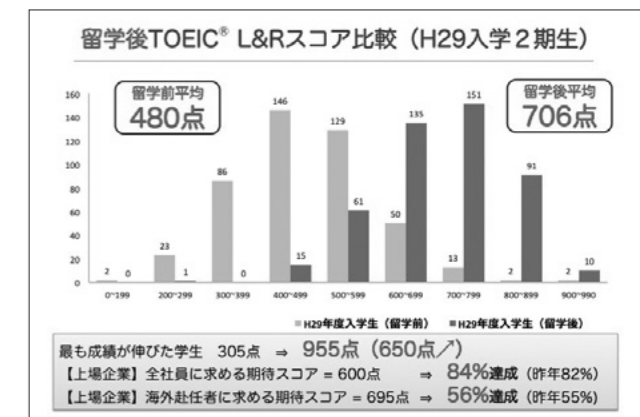
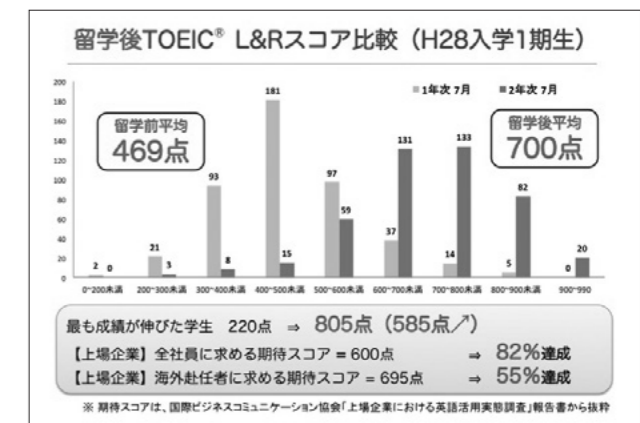
留学後である2年生の後期以降のカリキュラムは、かなりタイトです。1年生で留学するため、専門科目も2年生の後期以降になってしまうという大きなジレンマがありますが、我々は早期留学を優先しました。早期留学をする一つのメリットは、2度目の留学が可能であることです。今までも交換留学制度はありましたが、IELTSやTOEFLのスコアが足りず、行ける学生も少ないのが実情でした。国際学部の学生は一度留学をしていますし、英語力にも不足がないということで交換留学制度を利用する学生数が増えました。実際に今回は20人ほどが国際学部から留学しています。

国際学部の特徴は、先ほど申しました、早期留学と

ELSとの連携です。そして、留学を成功に導くための留学準備科目として、留学セミナーなどがあるだけでなく、異文化理解、グローバル化入門、基礎ゼミなども行っています。留学のための英語を勉強するだけでなく、レポートをきちんと書ける、パワーポイントも作れる、プレゼンテーションもできるという人材になるため、1年生の前期には様々な知識を身に付けることができる授業形態をとっています。

また、学部全員、留学前にTOEIC® Testsの4技能を受けることになっています。グローバル専攻に限定しますと、TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R)において、1期生が469点、2期生が480点。今年の3期生が494点となりました。これは着実に新入生のスコアが上がっていることを示しています。実際に入学レベルの学力が上がっているという背景もあるかもしれませんが、過去2年間のELSの先生方の教育によってTOEIC L&Rスコアもアップした可能性も大いに考えられます。

留学後の1期生のTOEIC L&Rスコアを確認します

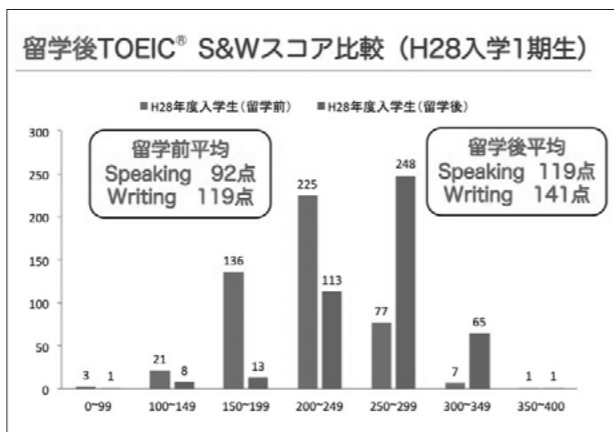


と、留学前が469点だったところ、留学後7月の平均スコアは700点となりました。我々は学部開設前に、留学後の目標スコアを700点と設定していたのですが、その数値をクリアしてくれ、嬉しい結果となりました。国際ビジネスコミュニケーション協会の資料を参照しますと、ビジネスの場で社員に求めるTOEIC L&Rスコアは600点とのことですので、この時点で82%の学生が達成したことになります。また、海外赴任者に求める期待スコア695点と比較しますと、55%の学生が達成しています。

2期生に関しましては、先日TOEIC L&Rスコアの結果が出ました。留学前の平均は480点ですが、帰国後は706点です。1期生と2期生は母体が異なるため単純比較はできませんが、2期生はスコア下位層自体が少ないため、モチベーションが2期生のほうが高いことが考えられます。

■ 自己発信型の英語力を付けられているか TOEIC® S&Wで確認

上で述べたように、国際学部ではTOEIC® Speaking & Writing Tests (以下、TOEIC® S&W)も行っています。大学レベル、または学部レベルで行っている大学はまだ数少ない中、我々が今回TOEIC S&Wを選んだ理由は、テストスタイルが自己発信型だと考えたからです。我々は、自己発信ができるグローバル人材というのを求めていますので、今回TOEIC L&R



だけでなくTOEIC S&Wも行うことにしたわけです。TOEIC S&Wの受験経験がある学生も少なく、キーボードの使い方も含めハンディキャップはありますが、2016年度入学、1期生の留学前と留学後のそれぞれ平均をグラフ化すると、やはりこちらのスコアも上昇がみられました。留学前はSpeaking92点、Writing119点だったところ、留学後は119点、141点に上がる結果となりました。2期生のスコアはSpeakingが留学前が94点、帰国後が125点、Writingは留学前が122点、帰国後が140点となりました。

2018年1月21日に実施されたTOEIC S&W公開テストのデータではTOEIC® Speaking Testの平均スコアが122.9点、TOEIC® Writing Testは141.1点です。両テストとも、当学の学生の平均スコアは若干劣っています。しかしTOEIC S&Wに関しては、母集団が少なく、受験者も、仕事で英語が必要な人や英語に自信がある人が多いことが考えられるため、TOEIC L&Rに比べて、当学の学生たちの平均スコアは高いのではないかと考えています。

■ 留学生の生活とTOEIC® Testsの紐付け

TOEIC Testsスコアと留学中の活動の相関性をご紹介したいと思います。当学は大人数でTOEIC Testsを行っており、かつ、全員留学という貴重な環境があります。この中で、留学中の環境や学生自身のパーソナリティ特性などがTOEIC Testsのスコアの上

昇と因果関係があるのではないかと考え、2017年度、国際ビジネスコミュニケーション協会と国際学部のプロジェクトチーム7名で共同研究をしようということになりました。実際に留学前後で学生にアンケートを取って、TOEIC Testsスコアと留学前後のアンケートを統計処理しました。1期生ですので、今回は予備的な分析となりますので、ご紹介という形でお話ししたいと思います。

結果は留学前にスコアが悪かった学生や、本当は実力があるのに留学前のTOEIC Testsでは点数を取れなかった学生など、特別な例も統制した形で、統計学に詳しい教員が中心となり統計処理をしています。

■ TOEIC® Testsスコアと留学中の活動の関連性から見えること

結果から分かったことを少しご紹介します。我々の留学制度ではホームステイと寮の居住形態はおおよそ半々です。学生も選ぶ際に悩むようで、相談も頻繁に受けるのですが、確実な答えを返すことが難しい相談の一つでした。滞在先形態によるTOEIC Testsスコアの違いについては、Listeningスコアは差が見られたことが分かりました。4技能それぞれ、ホームステイのほうが少し数値が上でしたが、特に統計的に有意なのはListeningだったということになりました。

Listeningのスコアのみに有意性が見られた事実は当然といえば当然ですが、ただ、Speakingのほうで

滞在先形態によるTOEIC®得点上昇の違い

- 留学中の滞在先形態（寮 or ホームステイ）によるTOEIC®スコア上昇の違いについて検討
 - 留学期間中に滞在先形態が変わらなかった335名を対象に分析

	留学前	留学後
Listening	265.9	384.6
Reading	198.0	313.6
Speaking	90.3	117.6
Writing	119.3	139.6

はあまり有意な差が出なかったというのは、統計学の先生からも指摘がありました。これはおそらく、留学は24時間英語漬けとは言うものの、常に会話が成立するホームステイ環境と、しようと思えば部屋の中にこもってゲームをするなどが可能な寮の違いなのかもしれません。

スコアの上昇と留学中の活動、パーソナリティ特性との関係についてもまとめました。勤勉性、状態自尊心、セルフエスティーム、それから資質的レジリエンス、つまり柔軟性や粘り強さの特性がもともとアンケートの中で高い学生に関しては、Writingのスコア上昇の程度が高いという相関性が出ております。

これらの結果から、スコアの上昇と学生の特性に関連があるということが、今回の統計で分かりました。留学中の余暇活動が少ないほどSpeakingのスコア上昇が高いという結果も出ています。素直に考えると逆の結果が出るのでは、と考えてしまいますが、どういう余暇を送っていたのかにもよるのかと思います。

1期生は112人でパイロット統計を行いました。2期生に関しては、まだデータ処理ができていませんが、1期生より多い人数で行っています。今回の発表に関しては、まだ母数が少ないためあまり説得力がないかもしれませんが、今後も継続したデータ収集を行っていきたいと思います。また、今後は学年ごとの特徴を均等にし、より信頼性、妥当性の高い分析結果に基づく考察を行う必要があると思います。データが増えていけば、留学前の得点に基づく群分けも可能です。そして、4技能の得点上昇と留学中の活動との関係

Listeningスコアには滞在先形態による差がみられた

- 全体的にホームステイの得点上昇の程度が大きいが、統計的に有意な差があったのはListeningのみ
- その他の3技能については滞在先形態による有意な差はない

滞在先形態	Listening	Reading	Speaking	Writing
寮 (199名)	112.4	112.3	26.0	19.3
ホームステイ (136名)	127.9	120.5	29.1	21.8

※1回目のスコアを共変量とした場合の平均値

	TOEIC® Speaking 受験者総数: 1,050人	TOEIC® Writing 受験者総数: 856人
最高スコア (Maximum Score)	200	200
最低スコア (Minimum Score)	10	30
平均スコア (Mean Score)	122.9	141.1
標準偏差 (Standard Deviation)	28.9	28.7

www.iibc-global.org/toeic/official_data/sw/data_aveilst/sw_20180121.html
国際学部1期生帰国後スコア: Speaking 119 Writing 141

今後の展開・展望

1. 継続したデータ収集
 - ✓ アンケートへの回答はあくまで任意なので回答してくれない学生もいる
 - ✓ 学年ごとの特徴などを均した、より信頼性・妥当性の高い分析結果に基づく考察を行う必要性
 - ✓ データが増えれば、留学前の得点に基づく群分けが可能
2. 4技能の得点上昇と留学中の活動との関係の把握
 - 学生個性やTOEIC®スコアに応じた効果的な留学環境の整備

把握することで、国際学部の中でも、学生の特性やTOEIC Testsスコアに応じた効果的な留学環境を整備できるのではないかと考えています。例えばTOEIC Testsのスコアを上げたい場合の、留学時に推奨する活動の指導などもできるのかもしれませんが。この統計結果に関しては、どこかで結果を公表できる機会があれば皆様とも共有したいと思っておりますので、そのときにはご意見をいただければ幸いです。

これをもちまして発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

Q&A
セッション

各大学における学生が必要とする英語教育について



同志社大学 圓月 勝博 氏
山口大学 植村 隆 氏
近畿大学 藤原 尚 氏
藤田 直也 氏

英語が苦手な学生たちの勉強への
動機付けについて

英語に苦手意識を持つ学生に対する英語学習へのアプローチ、動機付けはどのようにされていますか？
良い施策があれば教えてください。

同志社大学：圓月 氏

学生は、数年前と比較すると多様化しています。単に学力格差だけの問題ではなく、学ぶ目的がそれぞれ違うのです。学生一人ひとりの就学目標が異なるので、それぞれに異なる動機付けが必要です。例えば、留学に憧れている学生がいたとしたら、その具体的な方策やメリットなどをきちんと説明して、留学に向けた英語学習のモチベーションを作るための材料を提供していくことが考えられます。

英語民間試験に関しては、学生の多くはどんな試験でも受けた方が良くというように考えているようですが、各試験それぞれ特性、使用目的が異なります。TOEIC® Testsは日常的な英語からビジネス向けの内容も含んでいて、日本企業への就職活動に際して、とても重視されます。ただし、実際に英語を使う場面では、必ずしも常に完璧な英語を話す必要はありません。

日本語と英語が混ざった会話でもスムーズにコミュニケーションができることもあります。ですから、必ずしもTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) で、例えば、800点を取ることを全ての学生が目標にする必要もありません。しかしながら、最低限のスコアは必要だというように、学習目的を明確にしてあげることがモチベーションにつながるように思います。

山口大学：植村 氏

この問題は、永続的な問題だと思っています。私の所属は工学部なので、工学系の学生を見ると、高学年次と低学年次によって、モチベーションの持ち方が異なるように思います。高学年次の学生たちは工学そのものや、テクノロジーなどに興味を持っている学生が非常に多いため、英語は片言でも海外の技術研修や現地のプログラムに参加してみようという学生は少なくありません。

そのような意識があっても、やはり英語にアレルギーがあり、少しためらってしまう学生もいます。そのような学生には、研究室の先生と語学教員が協力し、まずは実際に行ってみなさいと声掛けをします。技術研修後に行ってみたら、思ったよりも現地の学生とコラ



ポレションできて良かったという声が多く聞かれるので、なるべく海外技術研修に行かせるよう、専門教育の先生と一緒に学生たちに働きかけています。

低学年次の学生に関しては、勉強の仕方から苦手意識を感じている学生が多いように思いますので、それを打破するためにも授業を履修してほしいと思っています。5年間の“Go Global Japan”における取り組みでは、最初のオリエンテーションとなる授業と、その次の実質的な授業の2回で確実に履修につなげられなければ、4年間の学部生活の中で二度と英語学習の道に戻って来られないことを痛感しました。そこで、なるべく1、2回目の授業では、少しでもポジティブな感情を抱いてもらえる内容にすることを心掛けています。1回目のオリエンテーションの中で話すことは、教員が考えていること、教員がどういう人間であるか、学生時代の留学経験などを含め教員の半生を語ったりします。その中で、自分自身が英語を通して得たことやキャリアの話、英語ができるとこれだけ人生にとってプラスがあるというような話をし、英語への興味を抱いてもらい、履修につなげる試みです。“Go Global Japan”事業期間中はこのような取り組みをすることによって、初年度が24人だったところ、最終年度には98人にまで履修登録者が増えました。完全な答えではありませんが、少しは意味があることかなと思っています。

近畿大学：藤原氏

一つは、当然のことながら、大学入学時点で学生によって語学力に差があります。その差があることを我々がどう見て、どう教育していくかが重要になります。

そこで、語学力でクラス分けをするために、当学ではプレースメントテストを行っております。これは、現時点では14学部中12学部で、TOEIC Bridge® Testを使用しています。英語ができる学生も苦手な学生もいますが、英語が得意でない学生たちの英語教育に携わる先生には、とにかく英語を嫌がらないで勉強を続けられるようにしてほしいと伝えています。

また、学生が最も英語の大事さを感じるの、実際の人との付き合いではないかと思しますので、当学の東大阪キャンパスでは、2006年から英語村を設置しました。英語村は、教員ではなく、ネイティブスタッフを配属し、そこでスナックや飲み物を交えながらネイティブスタッフと交流ができる施設です。各学部の先生による、様々なトピックスの講演やアクティビティも開催していて、気軽に英語で意見を交わし合える状況を作っています。英語村ができてから、既に130万人を超える方々が訪ねてきてくださっています。基本は本学の学生と教職員のみですが、一般の方々にもオープンする期間もあります。直近では、9月3日から9月12日の10時から15時30分までは高校生以上であれば入っていただくことができますので、近畿大学の英語教育を垣間見ていただければと思います。

留学生と触れ合う制度や機会も多く設けています。例えば、留学生に対して、ボランティアでいろいろなかケアを行う留学生サポート制度があります。ここで留学生と接して、英語力向上の重要性を感じてくれる学生もいるようです。また、発表でも申し上げましたが、昨年「大学の世界展開力強化事業」(ロシア)に採択されたことより、今ロシアから多くの学生が来ています。この学生たちに、日本の文化や技術を説明する際に使う言語ツールはやはり英語になります。

また、国際学部以外の学部でも短期留学などが盛

んに行われています。英語を学ぶ重要性を分かってもらうためには留学する機会を与え、また、留学生と触れ合う機会を増やすことだと考えています。

大学英語教育へのTOEIC® Programの導入について

大学の英語教育にTOEIC® Programを導入する際、課題や反対意見はありましたか？ また、それをどのように解決し導入に至ったか教えてください。

同志社大学：圓月氏

TOEIC L&R導入に関しては、現状では私の所属している英文学科でも導入しておりますが、全学的にも無料受験制度を導入し、受験を勧めています。しかしながら実は私自身、反対も弁護もしてきた立場です。

“Go Global Japan”に採択された際、語学力を測定する英語民間試験には最も汎用性が高いTOEIC L&Rを導入するのが良いだろうという流れになりました。ただし、提案理由として、TOEIC L&R導入の目的は、留学促進だと説明なさったので、その点には反対しました。反対した理由は、留学促進を目標とした外部英語試験の導入であれば、予算にかかわらず、TOEFLかIELTSに集中すべきなのではないかと考えたからです。TOEIC L&Rを導入するなら、その理由は日本企業への就職を念頭に置いたキャリア形成支援であることを確認して、学生にも学習目標を周知してほしいとお願いしました。

英語民間試験にも個性があります。どの試験を使用するにしても、その試験を活用した学習目標や受験目標を明確しておかなければ、導入の意味がありません。今の時代に、一つの英語検定試験に絞って全員に受けさせるという発想自体が、どこかで無理があるのかなと個人的には思っています。



もう一つ大事な点は、全学で全学生に受験させる上で、十分な支出対効果があると証明できるのか、ということです。現在の大学教育改革の一番大事な課題は、学習成果を可視化することなのです。

このような反対意見に対して重要なことは、教員と職員だけではなく、学生にも試験を受ける目的をきちんと説明し続けることではないかと思います。説明が行き届いている学部を見ると、受験率も高く、スコアも上がっています。TOEIC L&Rの導入には、学生に受験する目的をどのように浸透させていくか。それが大事なのではないかと思います。

山口大学：植村氏

本学の場合は、地方の国立大学ということもあり、予算も限られていました。反対意見ではなく、私の場合は、TOEIC L&Rを導入した後の課題についてお話ししたいと思います。

目立つ課題は、1年生の6月に受験して以降、複数回受験する学生が非常に少ないということです。よって、スコアの向上を学生自身が確認できる状況がまだ少ないことです。

学生に2回目の受験を勧めると、前向きに検討しながらも、条件として、各パートでしっかりといい得点が取れるような自信ができてから、と返ってきます。TOEIC L&Rは2時間の長丁場の試験ですし、TOEIC L&Rの性質を知らないと時間配分の戦略も立てられ



なければ、捨てる問題、自分が解く問題等も把握はできないはず。よって、学生には、まず2時間の受験を経験することの大事さを訴えているのですが、なかなか複数回受験につながりません。その一因には、やはり経済的支出が伴うという事実があります。教員の立場から、自分への投資であると訴えておりますが、なかなか満足のいくような複数回受験には繋がっていません。“Go Global Japan”に採択されていた時には補助金があったため、経済支援を行いました。それ以降は受験者数がなかなか増えません。

このような課題を感じている当学としましては、ご質問にあるような、どのように解決して導入に至ったかという点は、まだ挑戦中です。

近畿大学：藤原 氏

結論を申し上げますと、当学では反対意見はございませんでした。先ほどもお話ししましたように、もともと学生の英語能力を測るための一つの指標として他の試験も取り入れていたこともありますし、法学部全体でもTOEIC® Programをプレースメントテストに使ってました。全学的に進める前に、既に実績を持っておりましたので、反対意見が無かったのかと思います。現在は薬学部、国際学部、医学部以外の12学部は全てTOEIC Bridge Testを実施しております。

ただ、費用面に関してはコストがかかるという問題があります。しかしこれに関しても、今後の学生の英

語能力を発展させるために必要なものであるということも大学側が理解していますので、TOEIC Programの導入に対して、サポートがある状況です。

教育の質保証について

大学では、一般的に2年生で共通教育が終了しますが、教育の質保証の一つとして英語が重要視されている中、3、4年生が継続的に英語学習に取り組む仕組みづくりはされていますか？

同志社大学：圓月 氏

まず、ご質問の中にあつた、1、2年生と、3、4年生の間に溝があるということにつきまして、一般的に共通教育を煙突型という形で考えておられると思います。しかし当学の全学共通教養教育は、専門教育が4年間あるように、同じく共通教育も4年間あるというコンセプトを明確にしています。すなわち、共通教育は2年間で終わるものではないという考えです。この考え方はかなり浸透してきており、3年生でも共通教育を履修する学生たちも多くなります。

ただし、4年生になると就職活動が始まり、無駄な単位はできるだけ取らないという風潮があります。ですから4年生の秋学期に選択できる科目を増やすという対策はしています。4年生になると学生の気持ちは、履修から離れがちです。これは社会全体の制度的な問題でもありますので、今後は大学の特定のプログラムを調整するというよりも、学生だけではなく、学生を雇用してくださっている企業も含めて、大学教育に対する文化自体を考え直していかないといけないのかもしれません。

山口大学：植村 氏

テクニカルコミュニケーション科目群は“Go Global

Japan”における構想原点の一つである、自己研鑽能力の向上という面から、4年生まで英語教育の機会を提供しようという発想で設計されました。そのため、テクニカルコミュニケーション科目群におきましては、4年生までの英語教育体制があります。ただし、必修科目ではありませんので、3、4年生全員が受講するかとなると、それは学生の自由意思となります。

本学は2年次の英語科目を、工学部を中心に7学科中2学科で必修化しました。工学部は元から必修科目数が非常に多い学部ですが、その中で英語を必修化したということは、非常に大きな動きです。これは大学としても英語教育を非常に重要視していることを社会にメッセージとして送っているのだと思います。

近畿大学：藤原 氏

本学といたしましては、全14学部の中で、3年生以降も専門科目を英語で行う科目を増やしています。理工系の学部は4年生に進んだときに、研究室で卒業研究の実験に携わる時間が多くなってしまいます。そのためにも、やはり英語が必要となりますので、3年生から英語科目がかなり重要視され、学部、学科によっては、必修化しているところもあります。英語が分からないと、国際会議に行っても内容を把握することができませんし、論文を書くこともできないからです。このような理由から、1、2年生の教育を終えた後も、3、4年生で英語を学ぶ環境を作り、英語の質保証を保つようにしています。また就職活動時にも企業からTOEIC L&Rのスコアを要求されます。このことは学生も分かっておりますので、前向きに英語教育を受けています。また、大学院は多くの科目で、英語で授業を行うようにしております。

なお、学年に関係なく、語学教育センターでは無料の英語や他の外国語の講座を開講し、学生たちが常に語学力を高めていくことができるサポートを大学全体で行っております。英語教育、語学教育に対して積極的に行っている国際学部から、藤田先生に話してもらいます。



近畿大学：藤田 氏

国際学部に関しましては、スタートラインに留学があるため、他学部と学生のモチベーションや継続性については若干異なることを前提でお話しさせていただきます。国際学部では、留学から帰ってきた時の燃え尽き症候群が想定されますので、帰国後、受講内容に落胆することがないように、常に学生のニーズを意識しながらカリキュラムを設計しています。学生たちは、アメリカで1年間英語で勉強を行ってきた素地がありますので、英語で教えられる先生に関しては、できるだけ多く英語のクラスを開講してもらい、2年生後期から英語による専門科目を多数開講しています。

オールイングリッシュで授業を行うことは大変なことですが、国際学部開設当時から海外からの留学生の受け皿としての機能も果たしていますので、留学生の多くが国際学部の授業を受講しています。受講者に1人でも留学生がいると、授業は全て英語で行わなければならないとなります。私の授業を例にしますと、留学生には前列に座ってもらい、学生たちになぜ英語で行っているのかという理由もきちんと示します。100%英語で授業を行うため、中には内容を100%把握できない学生もいるかもしれませんが、英語だから分からないとは言わせないように、教員側も英語で行う授業の資料を、前週に学生に渡して読ませるなどの工夫や準備をして臨みます。海外の留学生が多ければ異文化理解も増えますし、学生同士が言語の壁を超えて仲良くな

ると、コミュニケーションをとりたいと思えるので、より英語が身に付くということを実感しています。

これは国際学部に限った話ですので、全学の状況という話ではありませんが、他の学部においても、例えば法学部のように3年生でも英語を必修化する動きもあります。「実際に使える英語」というものをモットーにして教育の質保証を保っている学部も多いように思います。

発行月：2018年12月

発行：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
TEL (03) 5521-5012 FAX (03) 3581-5512

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル
TEL (052) 220-0282

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL (06) 6258-0222

公式サイト

<http://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC, TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service, Princeton, New Jersey, U.S.A, and in Japan under license.

本書の無断転載・複製を禁ず